



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	言語の普遍性のもとで日本語のしくみをとらえる（第二報）
Author(s)	村上, 三寿
Citation	琉球アジア文化論集：琉球大学人文社会学部紀要 = Bulletin of the Humanities and Social Sciences University of the Ryukyus(6): 19-81
Issue Date	2020-03-14
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45412
Rights	

言語の普遍性のもとで日本語のしくみをとらえる (第二報)

村 上 三 寿

〈言語の普遍性のもとで日本語のしくみをとらえる (その2)〉

村 上 三 寿

【第9回】—動詞の文法的なかたち—

この課は、単語としての名詞の文法的なかたちにつづいて、動詞の文法的なかたちを体系としてとらえる授業である。名詞であれ、動詞であれ、文のなかでの単語の文法的なかたちの体系をとらえる文法論の分野は、形態論である。品詞としての動詞が文のなかでどのような文法的なかたちをとって存在するかは、文を構成する要素としての単語が文のなかでどのような役わりをもたされているかの反映である。文それ自体がどのようなセンテンスタイプの文であるか、そして、その文のなかで動詞がどのようなはたらきを背負わされているか、そのことが動詞の文法的なかたちとなってあらわれている。すなわち、単語の形態論は文の構文論の反映であるでもあるし、構文論もまた形態論に支えられているともいえる。あたりまえのことではあるが、形態論と構文論はたがいに依存しあう、相互関係のなかにある。

格変化の体系のなかにある名詞が、動作をめぐっての物と物との関係のあり方や、できごとをめぐってのものごとの関係のあり方を、その文法的なかたちのうえに背負って存在しているとすれば、変化形の体系のなかにある動詞は、現実のものごとのあり方が文のなかにどのようにうつしとられているか、また、はなし手が現実のものごとをどのようなものとしてとらえ、そしてまた、はなし手がきき手に対してそれをどのようにのべているか、そういうことがその文法的なかたちとして背負わされている。

すなわち、動詞が文の述語となっているばあいには、その文法的なかたちは、文の象徴的な内容と現実との関係のあり方や、はなし手の現実に対する関係のあり方や、きき手に対する態度をうつしとっている。そういう意味では、述語になる動詞の文法的なかたちは、構文論的なカテゴリーとしての〈文の陳述性〉

を反映する文法的なかたちである。文の陳述性は述語の文法的なかたちによってだけで表現されるわけではなく、陳述副詞や主語との相互関係によって表現されたり、文それ自体のもつ意味的な内容や、文の人称性やテンポラリティにも依存しているのではあるが、述語の文法的なかたちが、文の陳述性のセンターであることはまちがいないだろう。述語になる動詞のさまざまな文法的なかたちは、文の陳述性をひきうけ、文を完結させる「終止形 (finite-form)」の体系である。言語の普遍性における「動詞の終止形」というのは、文のおしまいにあるからということではなく、述語として文の陳述性をひきうけながら、文を完結させるさまざまな文法的なかたちの体系のことである。動詞の文法的なかたちの体系は、文の陳述的なタイプの体系の反映でもある。

したがって、この課では、動詞の文法的なかたちが、どのような文のタイプをうつつとっているかを具体的にひとつひとつ確認しながら、それを体系としてまとめていくことになる。単語の文法的なかたちを体系として整理していくことは、形態論のもっとも重要な任務であって、それは構文論的なカテゴリとの相互関係のなかでの仕事でもある。現代日本の学校文法・国文法の活用表の本質的な欠陥は、構文論とのむすびつきのなかで動詞の全面的な形態論的な体系を構築していないということのなかにある。単語の形態論的な体系をどのような姿で整理するかは、言語の普遍性のもとの「単語とは何か」という単語の認定の仕方と、「単語の文法的なかたち」に対する認識の仕方の学問的なレベルが反映されている。そういった意味では、動詞の文法的なかたちの体系である「変化形の表 (パラダイム)」のつくり方のなかには、その国の言語学のレベルが反映している。しかし、それは〈日本語という言語それ自体〉の問題ではなく、学校文法・国文法の文法論に対する認識のレベル・学問のレベルの問題にすぎない。日本語の動詞の変化形もまた、言語のもつ普遍性のもとで、ひとつの品詞として構文論的な機能を背負っているものとしてとらえるならば、その形態論的なかたちの体系のなかに、人間の自然言語の普遍的なすがたをうつつだしている。その日本語の動詞のゆたかな文法的なかたちを、「変化形の表 (パラダイム)」として、構文論的なカテゴリを反映した形態論的

な体系として、その整然としたすがたを実感することがこの課のひとつめの仕事である。終止形というのは、たくさんの陳述的なかたちの体系全体のことであって、「ウ段」でおわるという基本形ひとつのことではない。

この課のもうひとつの仕事は、動詞の変化形の音声現象としての体系をとらえることである。動詞の文法的なかたちが構文論的なものをうつしとっているということにおいては普遍的な性格をもっているとしても、その形態論的なかたちづくりのし方ということになれば、それぞれの言語のもつ音声体系を反映しながら、個別の独自の変化形の体系をもっている。日本語の動詞にかぎらず、品詞の「文法的なかたち」というのは、同一の単語の文のなかでの変化形のことであるから、当然、語い的な意味をになう「語幹」の部分と、文法的な意味をになう「変化語尾」をあわせもった統一体としての単語のかたちのことである。そして、それは動詞の語幹を基礎としたうえでの屈折的な変化（母音交替）と膠着的な変化（接尾辞のつけたし）の2つのタイプがあるが、その文法的なカテゴリーにしたがって、同一の品詞であってもこの2つのタイプを使い分けたり、くみあわせたりしながら、1単語としてのひとつの文法的なかたちをつくりあげている。

日本語の動詞における、その文法的なかたちのづくり方を体系としてまとめあげることも形態論のもうひとつの大切な任務である。ここには、構文論の反映ということよりも、むしろその言語のもつ音声体系がうつしだされることになり、言語の音声的な歴史的な発展を反映しながら現代にいたっている、その整然とした体系をとらえることができる。とくにも、動詞の変化形のなかには、音声に基礎をおいた整然とした語幹と語尾のすがたが法則的なものとして存在しているために、母語としての日本語を習得していく小さな子どもにとっても、その文法的なかたちの理解と文法的なかたちのづくりだしは、きわめて容易なことである。単語の文法的なかたちのなかに正確に語幹と語尾を区別することができるからこそ、その語い的な意味と文法的な意味を正確にとらえることができるのであるし、きちんと生産的に法則的につくりかえていくことができるのである。日本語を母語とする子どもたちやわたしたち民衆の言語生活の実態からまったくかけはなれた、そして、人間の言語それ自体のもつ普遍性からも

大きくはずれた単語の認定のし方と、語幹と語尾の区別のし方のあわれな姿が、学校文法・国文法における醜悪な活用表のなかに、今なお日本の国語学の学問的な負の遺産としてのこざれている。

この課の内容は、授業をうけている学生たちばかりでなく、中学生や高校生たちにとっても、また大人たちにとってもきわめて納得のいくところである。まさしく、いつ・どこで・だれがやっても・だれを対象にしても、ということを実感として確信できる。

授業は、つぎのようなプリントをつかっておこなった。

動詞が文の中でさまざまにかたちを変えるのはなぜか？

(文法的な形)

—動詞の変化形はどんな意味(文法的な意味)をもつのか?—

[動詞の変化形]

動詞は文の中でかたちを変えることによって、何をあらわすのか？

1. 時間のちがい ----- (過去・現在・未来)
2. はなすの目的(気持ち)のちがい ---- (命令・たのむ・さそう・ねがい)
3. みとめ方のちがい ----- (肯定する・否定する)
4. ていねいさのちがい ----- (ふつう・ていねい)

※ 動詞の一番おきな仕事は文の中で〈述語〉となって、上の4つをしつかりと表現することにある。

これらを—〈文の陳述性〉とよぶ!

※ 〈述語〉の〈述べる部分〉という意味は、ただ単に〈テーマについて述べる〉ということだけではなく、〈文にそなわっている陳述性を述べる・表現する〉という部分であるという意味でもある。その中心となっているのが、まさしく動詞であり、そのために、動詞は実にたくさんの〈変化形〉を発達させている。

動詞の変化形のゆたかさは、動詞が〈はたらきもの〉であることの証明！

cf. 文の陳述性を構成している3つの要素

- ・テンポラリティ（時間性）——いつのことをのべているか？
- ・パーソナリティ（人称性）——だれのことをのべているか？
- ・モダリティ——文のできごとに対して話し手がどうかかわるか？（態度・気持ち・目的）

このうち、日本語の動詞は〈テンス〉の文法的なかたちと〈ムード〉の文法的なかたちは、動詞の変化形としてもっているが、〈人称形〉という動詞の文法的なかたちをもっていないため、文の〈パーソナリティ〉は主語の手だすけを借りながら、文全体で表現することになる。

[確認の作業 ①] ——動詞の文法的なかたちのもつ文法的な意味——

※ 動詞のつぎの変化形はどういう文法的な意味をあらわしているか？

こわした・たたいた・立った・とんだ
読んだ・走った・わらった・買った
勝った・飲んだ・ころんだ・およいだ

()

こわせ・たたけ・立て・とべ
読め・走れ・わらえ・買え
勝て・飲め・ころべ・およげ

()

こわそう・たたこう・立とう・とぼう
読もう・走ろう・わらおう・買おう
勝とう・飲もう・ころぼう・おようごう

()

こわしてくれ・たたいてくれ・立ってくれ・とんでくれ
読んでくれ・走ってくれ・わらってくれ・買ってくれ
勝ってくれ・飲んでくれ・ころんでくれ・およいでくれ

()

こわしたい・たたきたい・立ちたい・とびたい
読みたい・走りたい・わらいたい・買いたい
勝ちたい・飲みたい・ころびたい・およぎたい

()

こわさない・たたかない・立たない・とばない
読まない・走らない・わらわない・買わない
勝たない・飲まない・ころばない・およがない

()

こわします・たたきます・立ちます・とびます
読みます・走ります・わらいます・買います
勝ちます・飲みます・ころびます・およぎます

()

※ こういう系列のなかにつきの動詞をおいてみると、そこにはどういう文法的な意味がこめられているかという？

こわす・たたく・立つ・とぶ
読む・走る・わら・買う
勝つ・飲む・ころぶ・およぐ

①時間においては—— ()

②ムードにおいては—— ()

③みとめ方においては—— ()

④ていねいさにおいては—— ()

動詞の変化形の表（体系表）

		ふつうのいい方		ていねいないいい方	
		みとめる形	うちけす形	みとめる形	うちけす形
の べ る 形	現在・未来	こわす	こわさない	こわします	こわしません
	過去	こわした	こわさなかつた	こわしました	こわしませんでした
命令する形		こわせ	こわすな	こわしなさい	×
さそう形		こわそう	×	こわしましょう	×
たのむ形		こわしてくれ	こわさないでくれ	こわしてください	こわさないでください
まちのぞむ形		こわしたい	こわしたくない	こわしたいです	こわしたくないです

動詞は文の中でさまざまにかたちを変化させるが、基本形はすぐわかる！

[確認の作業 ②] ——動詞の変化形と基本形——

※ つぎの動詞の文法的なかたちはどういう文法的な意味をもっているか？
また、その基本形は？

(例) はしれ → (命令形) → (はしる)
あるこう → (さそう形) → (あるく)

1. およぎます → () → ()
2. はこばない → () → ()
3. よみましょう → () → ()
4. かいて ください → () → ()

5. たたくな————→ () ———→ ()
6. こわしません————→ () ———→ ()
7. はこんでくれ————→ () ———→ ()
8. すわりなさい————→ () ———→ ()
9. はしらねえべ————→ () ———→ ()
10. なぐりました————→ () ———→ ()

※ 動詞は単語の意味をひきうける大事な部分（語幹）と、文のなかでの文法的な役わりをひきうける部分（語尾）にわけることができる。うえの動詞の基本形の〈語幹〉の部分に下線をひいてみる。

動詞はどんなに形を変化させていてもその基本形はすぐわかる！

——語幹が共通していれば同じ単語——

[確認の作業 ③] ——動詞の語幹を確認しながら、基本形をとりだす——

※ つぎの動詞の基本形をかいてみると？

(例)

[はしらない
	はしります
	はしれ

 → (はしる)

1.

[はこばない
	はこびます
	はこべ

 → ()

2.

[およぎません
	およごう
	およぎなさい

 → ()

3.

[かきます]	→ ()
	かけ			
	かきましよう			

4.

[かわない]	→ ()
	かいません			
	かえ			

5.

[なきました]	→ ()
	なけ			
	なかない			

日本語の動詞の語幹と語尾の本当の姿は、ローマ字でかいたとき、みえてくる

— 言葉の本質は音声である —

[確認の作業 ④] — 動詞の語幹と語尾を確認する —

※ つぎの動詞をローマ字でかいてみる。そうすると、日本語の動詞の変化形の語幹がどこまでなのか、目でも確認できる。

(例)

[はしる	(hasiru)	→	(<u>hasir-</u>)
	はしれ	(hasire)				
	はしろう	(hasiro)				

1.

[こわす	()	→	()
	こわせ	()				
	こわそう	()				

2. たたく ()
 たたけ () → ()
 たたこう ()

3. およぐ ()
 およげ () → ()
 およごう ()

〔ひらがな〕は音節文字
 〔ローマ字〕は単音文字

※ 音声現象としての日本語の動詞の変化形の本当の姿（母音と子音）は単音文字でかきあらわしてみると、目でも確認できる！

語幹の共通性は

単語の同一性を保証する！

語尾の共通性は

文法的な役わりの同一性を保証する！

※ 語幹 — 単語の変化しない部分
 語尾 — 単語の変化する部分 } これは音声現象である！

[確認の作業⑤] — 音節文字だけではみえてこない語幹と語尾—

※ つぎの動詞をローマ字でかいてみる。そうすると、日本語の動詞の変化形の語幹がどこまでなのか、目でも確認できる。

【ひらがなの語幹】

【音声現象としての語幹】

1. ころぶ () → ()
 ころす () → ()

2. たたく () → ()
 たたむ () → ()

3. かく () → ()
 かむ () → ()
 かす () → ()
 かる () → ()
 (刈る)
 かう () → ()

※ これらの動詞をさまざまに変化させると、語幹と語尾のちがいははっきりする。ためしにやってみると？

※ みなさんが中学校・高校のときにならった〈学校文法の活用表〉で、語幹と語尾について、どんなにあやしげな言い方をしていたとしても、小さな子どもでも、これらが別々の単語であることはかくじつに区別できる。まさしく音声現象として、日本語の動詞の本質をうけとめているからである。(真理は単純な法則によってつらぬかれている！そうでなければ、小さい子どもが法的に日本語をつかひこなせるわけがない！)

このようなプリントをつかひながら授業をおこなうなかで、学生たちは日本語の動詞の変化形のほんとうの姿についても、名詞のときとおなじように、世界の学問の常識のもとで、言語の普遍性として、日本語の変化形のパラダイムを客観的に体系的にうけとめている。

- 今日は、前回の名詞の授業につづいて、動詞の文法的な形について学びました。まずは、動詞を現在形・過去形・命令形・勧誘形……などに分け、それらはすべて終止形の一部だと学びました。今まで原形(現在形) = 終止形だと教えられていたのですが、他の形でも文が終止するのに変わりはありません。そんな当たり前のことにやっと気づかされました。また、文法的な形で分類した動詞のその基準は、「時間のちがいが」と「聞き手に対する態度のちがいが」だと学びました。さらに、文法的な形を理解するのに欠かせないのが、単語の「語幹」と「語尾」です。今まで勉強したものと同じようですが、決定的に違ったのが「子音」の概念です。「たたく」と「たたむ」のように、一見、語幹が同じように感じる2つの単語の正しい語幹は、「たた—」ではなく、「tatak-」と「tatam-」です。子音と母音を区別することで、きちんと単語に特有の語幹がうまれます。このことに衝撃を受け、最初の授業で先生がおっしゃっていた『言語の本質は音声だ』ということをしっかり理解することができました。(Karin.W)

- 今回の講義では、「動詞の文法的なかたち」について学びました。動詞はなぜ変化するのか? という問いに対して、①時間の関係、②聞き手に対する関係、③みとめ方、④ていねいさ、の4つに分類することができるということを知って、今まで何となく使っていた動詞の本質を学ぶことができたと感じました。また、標準語では言い表すことができない言い方であっても、方言にすれば言えてしまうような言い方があることにも、日本語の面白さを感じました。さらに、語幹は単語の語彙的な意味を引き受けている役割を持っているが、私たちは文字で区別をするのではなく、小さい時から耳で聞いて単語を区別し、理解しているということを授業の中で初めて気づかされたし、先生がよく授業の中でおっしゃっている「言語の本質が音声である」ことを改めて実感することができました。日本語を勉強するにあたって、日本

語をローマ字にして、語幹と語尾に分けるような勉強は今までしてこなかったけど、日本語の本質を学ぶためには、音声を使い、現象を知ることが重要なのだと思いました。(Ayaka.T)

- 今日から新しく動詞の文法的なかたちについて学んで、まず、動詞の変化形は、①時間、②聞き手に対する態度、③みとめ方、④丁寧さ、の4つを表すということが分かりました。また、1つの動詞の形でも比べるものによって、未来形や肯定形、普通形といったように、いろいろな種類をもつことに気づきました。そして、言語の本質は音声であり、子音までがふくまれるということ、ローマ字に書いて表すことで理解できました。語幹と語尾の具体的なちがい(どういった意味をもつか)を知ることができ、改めて区別することができました。これから動詞の本質について学べるのが楽しみです、より深く学んでいきたいと思いました。(Minami.N)

- 動詞の変化形は、時間のちがい、話す目的のちがい、認め方のちがい、丁寧さのちがい、の4つあることがわかりました。また、これらは終止形の体系(どれも終止形である)で、基本形=終止形ではないということが、確かに!と思いました。ちょっと話がズレますが、目的(気持ち)のちがいで、命令、たのむ、さそう、ねがいと、相手へのお願いの仕方ってこんなに種類があったんだと意識していなかったので、ひとりでそう思っていました。語幹については中学生の時、「同じ語幹のものいっぱいあるけど、意味ちがうじゃん!!」と思ったことがあるので、アルファベットにしたときの子音までが語幹ということに感動しました。小学校でも理解できるし、これからはこの説明が広まればいいと思います。(Chika.H)

- 今日の講義もありがとうございました。梅雨なのに、相変わらず雨が降らないですね。断水が心配ですが、晴れているので毎日が楽しい

です。今日は、自分の大好きな復習の時間がなかったので、自分でとりくんでおきたいと思いました。今日の講義では、動詞の文法的なかたちについて教わりました。毎回の授業で新しい発見があって楽しいのですが、今日の授業では、今まで思っていた「終止形」の概念がくずされました。命令形も終止形であり、今までの終止形は基本形だということがわかりました。これからも真理を探究していきたいと思います。

(Hiroko.T)

- 中学・高校で習った活用表で区別するのではなく、時間のちがいをどの4つで区別することで、動詞をより自然に区別できた様な気がしました。同じ「こわす」「たたく」でも、比べるものによって、動詞の文法的な意味の種類が変わることや、そのように比べることで動詞の変化形のゆたかさに気づくことができ良かったです。また、語幹が同じに見える動詞はどのように区別するかという時に、平仮名で区別するのではなく、ローマ字で区別することで、きちんと区別できるようになるのが凄いなと感じました。ローマ字で区別すると、-anai・-imasu・-u・-e・-ô、と語尾が共通している点が美しいと感じました。今まで習ってきた活用表が『カキケケ文法 (あいうえお活用表?)』ともよばれていることが何だか面白かったです。日本語を普段と違う視点でみると、初めて知ることが多くあり、楽しかったです。

(Rina.K)

- 動詞の変化には何があるか考えてみた時、今までは少ししか頭に浮かびませんでした。ですから、今回、こんなにも動詞の変化形があると改めて知り、動詞の豊かさに感動しました。新鮮だったのは語幹・語尾の話です。「ころす」「ころぶ」の語幹が一緒だと気づいたとき、「あ、同じだ! どうしよう」と固まってしまいました。アルファベットで考えてみると、子音も大きな意味をもっていて、大事なものだと思いました。また、-anai・-imasu・-u・-e・-ô、と語尾が決まっているというのも今まで知らなかったもので、とてもおもしろかったです。今までの

教科書や参考書が分かりにくかったのだと改めて感じました。家で見返してみようと思います（笑）。
(Moeka.K)

- 今日は、動詞が文の中でさまざまに形を変えるのは何故か、動詞の変化形はどのような意味をもつのか、ということを学ぶことができました。動詞は、時間性・目的・相手への態度を表すことができると、初めてわかりました。考えてみれば納得できることですが、今まで考える機会はなかったし、また、小学校・中学校では、動詞の活用形は「未然形」「連用形」「終止形」「連体形」「命令形」など、よくわからない言葉で覚えさせられ、「未然って何?」とずっと思っていたので、今日の授業で新しい動詞の役割・形を知れてよかったです。また、語幹についても、今まで「ころぶ」の語幹は、「ころ」だと思っていました。子音まで区別して、「korob-」が語幹、「-u」が語尾だと認識するとすごくしっくりきます。「言語の本質は音声」という『真理』もすごくしっくりきました。今日も本当にありがとうございました。（Nanako. T）

- 今日は動詞の文法的なかたちについて学びました。英語で未来を表すとき、「will walk」のように助動詞と動詞の2単語を使いますが、日本語でも「はこんで/くれ」のように「くれ」という助動詞を使うことを教わりました。「will」も「くれ」も、本来の意味を失って働く（文法化する）という共通点があることがわかりました。今日、面白いと思った話は方言における「誘う形の打消し」です。標準語には存在しないのに、東北や沖縄の方言（うちなーやまとぐち）には存在することに驚きました。あと、驚いた話は語幹と語尾の話です。語幹が単語の語彙的な意味をもっているのに「ころ（殺）」「ころ（転）」は同じ意味ではありません。日本語の本当の語幹は子音まで含むので、「koros-」と「korob-」は語幹として音声的にもしっかり区別され、後に続く語尾もきっちり一致するという事に感動しました。この厳密な文法体系が文字を知らない民衆によって発展したことにも驚きです。（Yuuko.Y）

- 今まで「終止形（基本形）」とよんでいたものは、過去形・命令形・勧誘・願望・否定形・丁寧などの形のうち、どれと比べるかによって捉え方や呼び方が違うことに気づいた。これらは時間・ムード・みとめ方・丁寧さによるということがわかった。小学校や中学校で、「終止形」以外の形も文の終わりに来るのになあとと思っていたので、今日の授業を聞いて納得した。本来の終止形の反対の意味にあたるのは中止形であり、終止形はムードなどによっていろいろな形をとるということがわかった。語幹は意味的な役わりを、語尾は文法的な役わりを担っていることがわかった。語幹をローマ字レベルで考えたことは今までなかったのでおもしろかった。語幹がひらがなによらないのは、言語の進化は文字を知らない民衆によって起こったからだと思って納得した。

(Miki.I)

- 今まで習ってきたこととは違って、基本形＝終止形ではなく、命令形や過去形なども終止形であるということに納得しました。また、高校の古典の授業で覚えさせられた活用表の中に語幹を記入する覧があり、十分な説明を受けなかった為、理解していませんでしたが、語幹は単語の変化しない部分であり、同一性を保証するという短い説明で理解することができました。「ころぶ」と「ころす」は一見同じように見えるけれど、語幹はローマ字でかいた時の子音まで区別する為、「korob-」と「koros-」であると分かり、実際にローマ字で記入すると、とても分かりやすいと思いました。

(Mikana. I)

- 今回の授業で頭に残っているのは、動詞の語幹は単語の語彙的な意味を担っているにもかかわらず、「ころぶ」と「ころす」のように教科書上では同じ音の単語同士は音声だけだと区別がつかず語幹の定義とは矛盾してしまうということです。この矛盾からいえるのは、言語の本質は音声であり、私が今まで本質だと思っていた文法や教科書で示されている言語のルールは実はまちがっていたということです。無意

識のうちに私たちは語幹をおしまいの子音まで理解しているということも今まで気づきませんでした。文法などは人があとからつけて書いたものだから、じつはまちがっているということがすごく衝撃的でおもしろかったです。ありがとうございました。(Yuka.T)

- 今日の授業では、動詞の文法的なかたちについて学びました。動詞の変化形においては、時間や気持ち、みとめ方、ていねいさのちがいがあることをまなび、確かにそうだなあと思いました。動詞の一番の仕事は述語であるとわかったし、文の陳述性とよぶことを知り、納得できました。また、語幹と語尾について、単語の同一性を保証したり、文法的な役わりの同一性を保証すると理解できたので良かったです。一番驚きだったのが語幹についてです。単語によっては同じ語幹になってしまう可能性があります、ローマ字になおすと、はっきり区別できるなあと実感しました。自分のためになったので良かったです。次回の授業も期待します。(Tomomitu.O)

- 今日は、改めて自分の目で見て考えることの重要性を感じました。まず、「～する」というのは現在形ではなく未来形にもなるということ、そして、命令形も終止形に含まれるということ。終止形が終わりにくるもの、であるなら、「水を飲め。」のように命令形も終止形になります。どちらも具体例を考えれば、すぐに分かることだあと思いました。語幹も、今までは変化しない部分、という認識でしたが、今日は、そこに同じ単語であるという保証、という新たな見方を学びました。その後の、ローマ字でしかわからない語幹の話は、正直感動しました。日本語がローマ字でないと正しく表せないというのは少しおかしな話だと思いましたが、逆に言語の本質が音声であるという裏づけでもあると思いました。(Tatuki.Y)

- 命令形も終止形だというのは、まさに自分が思っていたことなので、今回スッキリしました。そして、語幹の話も目からうろこでした。変化しない部分が語幹だという認識はしていましたが、母音・子音に着目しなければいけないというのは、とても驚きました。でも、言語の本質は音声だということを踏まえれば、当然の話で面白いなと思いました。どうして学校で教えてくれなかったんだろうと思います。ひらがなでの見かけにだまされていました。活用の表を覚えたりしていた今までの分類は何だったんだろうと思うくらい、今日教わった法則はシンプルで印象に残りました。誰かに教えてみたいです（笑）。

(Eri.O)

- 丁寧形の反対は粗末かな？と考えたので、「普通」であるということを知りなると驚きました。昔から動詞の活用形を「終止形」「命令形」など分けて習ってきましたが、先生が「すべて終止形である」とおっしゃり、まだ自分は昔習ったことに影響されているのかと感じました。先生がおっしゃることがもっともだと思います。今度からは、「文を終わらせる形」が終止形であると考えるようにします。語幹と語尾についても必死に定義を覚えたりしましたが、「こわす」の「s-」、「はしる」の「r-」までが語幹でないと成り立たないと聞き、はじめてそのことに思い至りました。また、これらは文字を知らない人々が発展させてきたというのも納得です。授業を通していつも自ら考えることができ、新たな学びにつながると感じます。

(Mika.O)

【第10回】 動詞の文法的なかたち（その2）

まえの課では、動詞の文法的なかたちを構文論的な役わりのなかでとらえ、述語としてはたらく際の動詞の文法的なかたちを体系としてまとめることからはじめた。述語は文の陳述性をひきうけるセンターであって、述語になる動詞

のたくさんの文法的なかたちが、整然とした、終止形の体系（パラダイム）をつくりあげている。終止形というのは、文のおしまい（文末）にあるからということではなく、文の陳述性をひきうけ、文を完結させるかたち（finite-form）のことである。このことをひとまず確認したうえで、さまざまな変化形のなかにある動詞の「単語の同一性を保証する語幹」と「文法的な役わりの同一性を保証する語尾」という普遍的な原則的な規定のもとに、日本語の語幹と語尾のほんとうのすがたを、音韻的な本質としてとらえた。国文法（学校文法）の活用表のもっとも根本的な欠陥は、動詞の形態論的な現象としての変化形を、構文論的な機能の体系のなかでとらえるレベルと、単語の内部のモルフォノロジカル（morphological・形態音韻論的）な現象の体系のなかでとらえるレベルとの、2つ段階の仕事が未分化まであることのなかにある。すなわち、この活用表のなかには、日本の国語学の学問的な未熟さが具体的なすがたとして凝縮されて反映されている。

この課では、まえの課でとりあげた後半部分の内容をさらに具体的にひとつひとつたしかめていくことになる。はじめに、いわゆる五段変化動詞とよばれている動詞の語幹の最後の子音に注目しながら、ひらがなとローマ字をつかって、「否定形・ていねいな形・基本形・命令形・さそう形」の5つの文法的なかたちをとりだす。こうすることによって、変化形の語尾が5つの母音からはじまることが、かんたんに目でも確認できる。日本語の短母音が「a・i・u・e・o」の5つしかないのだから、語幹の子音のあとの語尾が、5つの母音からはじまるのは当然であるが、こうすることによって、五段変化動詞（強変化動詞）の音声的な体系を、整然とした姿で、シンプルにとらえることができる。そのうえで、さまざまな動詞をひとつひとつさしだしながら、語幹のおしまいの子音に目をむけていく。はじめは、「k・s・t・m・n・r・g・b」の8つの子音をとりだし、そのあとに、「わらう・つかう」のように、基本形の語幹に一見したところ子音がない動詞をとりあげる。これらの動詞についても、否定形やうけみ形をとりあげることによって、変化形における語幹のおしまいが「w」であることが確認できる。このことは、旧かなづかいの「ゐ・ゑ・を」を歴史的

な音韻変化として発音してみることによって、さらにはっきりと納得できる。こうして、日本語の五段変化動詞の語幹のさいごの子音を9つ確認しながら、日本語の動詞の基本形が「ウ段」の音(u)でおわると一般的に認識されていることの、実際的な内容と本質を、整然とした規則的な変化形の体系のなかで、理論的にも確実なものとしてとらえていくことができる。

つぎの作業は、もうひとつのタイプの規則変化動詞、いわゆる「一段変化動詞(弱変化動詞)」の変化形の体系の本質的な姿をとらえることである。国文法の活用表のなかで、このタイプの動詞の、とりわけ、いまわしく愚劣にゆがめられた「語幹」と「語尾」を、きれいな整然とした音韻的な体系のなかでほんとうの姿として確認することである。このタイプの動詞は語幹が「い(i)・え(e)」の2つのタイプの母音でおわる動詞である。そして、基本形の変化語尾が「る(ru)」でおわるものにかぎられている。変化形の語幹が母音でおわるのであるから、語尾は子音ではじまることになり、ひらがなで書いてもローマ字で書いても、語幹と語尾は容易にくべつできる。このタイプの動詞の変化形の体系は、耳できいても、ひらがなで書いてもわかりやすい。しかし、国文法の愚劣さは、『単語の語彙的な意味をになう部分が語幹である』という、言語の普遍的な規定をゆがめてまで、変化語尾(suffix)の一部だけを切りとり、かたくなに、「いわゆる助動詞」という概念をひねりだして勝手に主観的に解釈し、日本語の動詞の変化形のほんとうの美しい体系をぶちこわし、みにくい姿で子どもたちにおしつけている。この課の授業によって、国文法の前近代的な非科学的なすがたが白日のもとにさらされ、日本語の動詞の変化形のほんとうの美しい整然とした体系が学生たちにも納得される。こうすることで、一段変化動詞のなかの「見る・寝る」のような動詞を、「語幹のない動詞・ゼロ語幹の動詞」などという国文法の活用表の愚劣な解釈がなりたたないことがはっきりする。「切る・着る」の2つの動詞も、漢字でかきわけなくても、アクセントばかりでなく、変化のし方のタイプによってもくべつできる。日本語の特質というのは、主観的にゆがめられた学説や解釈が特質なのではなく、日本語という〈言語それ自体のなかに客観的に存在する〉、音韻体系を基礎とする変

化形の整然とした文法体系の姿が特質なのである。

さらに、日本語には「来る・する」という2つの不規則変化動詞がある。国語法での、いわゆる「カ行変格活用・サ行変格活用」のことであるが、「語幹が単語の同一性を保証する」という普遍的な本質的な規定にてらしあわせていけば、この2つの動詞は、五段変化にも一段変化にも属することができない。まさしく日本語のながい歴史のなかで使いこなされ、変化しながら生きつづけてきた貴重な不規則変化動詞である。

そして、この課のさいごの作業は、規則変化動詞としての五段変化のタイプにふたたび目をむけて、過去形における音便変化の本質的なすがたをとらえることである。いわゆる「イ音便・撥音便・促音便」とよばれているものも、ただ業界用語として丸暗記すればいいということではない。ローマ字によってたしかめることで、五段変化動詞の語幹の子音の9つの種類が、正確に整然とした音便変化の体系をつくりあげていることを確認することができるし、そうすることによって日本語における歴史的な文法的なかたちの変化と音韻変化を目でもたしかめることができる。「イ音便」というのは、なにかの音が「イ (i)」という音に変化したということではなく、動詞の文法的な変化形全体の変更にともなって、語幹の子音の「k・g」がぬけおちた姿であることも、歴史的な変遷として納得しながらとらえられる。日本語の文法体系の変化も、音韻体系の変化も、その原動力は民衆の言語生活である。音声を基礎とした民衆の言語活動のなかで、日本語の文法体系も音韻体系も発展しつづけてきたのであるし、この先も、民衆が日々の言語活動のなかで変化発展させていく。

現代の日本におけるローマ字教育は、ただ音節文字のひらがなカタカナを単音文字に機械的にあてはめ、新しい文字を知る程度にとどまっている。現在の学校教育でも日本語の音韻教育という意識が欠落している。しかし、教室でのローマ字教育の意義というのは、単に来たるべき英語教育の準備のためや、パソコンのローマ字入力の実習のためにだけあるわけではない。ほんとうのローマ字教育は、はやりのグローバル教育のように表面的に外国を知るためのものではなく、日本語のさまざまな文法現象のなかにひそむ内的な法則を客観的に

確認するためにも、日本語の音韻体系の教育のためにも、有効であり、必要である。世界の学問の発展のレベルで日本語の体系をとらえることのできない、国语法（学校文法）の今のありさまは、最新のパソコン機器に江戸時代のソフトが巣くっているようなものである。

この課の授業も、つぎのようなプリントを使っておこなった。

日本語の動詞の語幹の本当の姿は子音まで！
 ——ひらがなという「音節文字」だけではわからないが、発音によく気をつけるとわかるし、「ローマ字」だと目でも確認できる——

[確認の作業 ①] 動詞の変化形の語幹をたしかめる

※ つぎの動詞の変化形の語幹はどこまでか？その語幹のさいごの「子音」をローマ字でかいて、確認する。

【動詞（変化形）】	【語幹はどこまで？】
『こわす』 (こわさない・こわします・こわせ・こわそう)	kowas-u (<u>s</u>)
『たたく』 (たたかない・たたきます・たたけ・たたこう)	
『はしる』 (はしらない・はしります・はしれ・はしろう)	
『およぐ』 (およがない・およぎます・およぐ・およごう)	
『はこぶ』 (はこばない・はこびます・はこべ・はこほう)	

『よむ』

(よまない・よみます・よめ・よもう)

『待つ (まつ)』

(またない・まちます・まで・まとう)

※ ここまでで、日本語の動詞の変化形の語幹のさいごの子音はいくつ

あったかな? () 計 ()

あと、もうひとつ (何かな?)—— ()

※ このように、変化形の語幹が子音でおわるために

語尾は 〈a・i・u・e・o〉 の 5つの母音から始まる
ことになる。

【五段変化】(強変化)

では、「わらう」「つかう」という動詞の語幹はどこまで?

——『わらう・わらいます・わらえ・わらおう』——

〔語幹は? 〕

日本語の動詞の変化形には、2つのタイプがある！

——日本語の動詞はきわめて規則的に変化するのだが——

[確認の作業 ②] 動詞をさまざまに変化させて比べてみると

※ つぎのA・Bのふたつのグループの動詞のちがいは何か？ 考えてみると？

A はしる・とまる・なぐる・かじる
切る・ねむる・あつまる・帰る・
とおる・上がる・まがる・ちぎる
乗る・しばる・やぶる・とる

B たべる・投げる・あける・しめる
やめる・起きる・考える・のびる
借りる・見る・とどける・あける
着る・すてる・ならべる・変える

※ つぎの動詞は、A・Bのどちらのグループの動詞か？

もぐる ()・つづける ()・ふとる ()・やせる ()・ねる ()
ほる ()・すべる ()・かさねる ()・さわる ()・なでる ()
ほえる ()・にげる ()・折る ()・けずる ()・決める ()
埋める ()・やる ()・やめる ()・おしえる ()・かざる ()
取る ()・ほめる ()・刈る ()・ためる ()・下げる ()

※ 動詞の変化形を具体的につくって比べると？

(否定形・ていねいな言い方・命令形・さそう形)

Aグループの動詞は？〈はしる〉	Bグループの動詞は？〈たべる〉
否定 ()	否定 ()
ていねい ()	ていねい ()
基本形 ()	基本形 ()
命令 ()	命令 ()
さそう ()	さそう ()
(語幹はどこまで?)	(語幹はどこまで?)

ふたつのタイプの変化形のちがいは語幹が子音でお
わるか・母音でおわるかのちがい！

※ Aグループ 【語幹が子音でおわる】

【五段変化動詞】——語尾が5つの母音からはじまる (a・i・u・e・o)

〈強変化〉——音声的に変化形全体のなかでの口形のうごきが
活発になる (はなやかな口のうごかし方)

※ 語幹がどの子音 (k・s・t・m・n・r・g・b・w) でおわるかによって
それぞれ (か行・さ行・た行 …… わ行) などの言い方もある。

※ Bグループ 【語幹が母音でおわる】

【一段変化動詞】——語尾が子音からはじまる

〈弱変化〉——語幹が母音 (i・e) に固定されている分、音声的
に変化形全体のなかでの口形のうごきがとほしい
(ゆるやかな口のうごかし方)

※ 語幹がどちらの母音 (i・e) でおわるかによってそれぞれ
(上一段・下一段) という言い方もある。

「切る (きる)」と「着る (きる)」は別のタイプの変化形！
——漢字をつかわなければ区別できないということではない！
語形変化のタイプのちがいによって音声的にそれぞれ別の
動詞として認識している——

※ 学校文法における語幹と語尾のとらえ方は?! (ありえない話!)

A グループの動詞【五段変化動詞】においては?

「ころぶ」と「ころす」の語幹がどちらも …… 「ころ-」

「たたく」と「たたむ」の語幹がどちらも …… 「たた-」

B グループの動詞【一段変化動詞】においては?

「おきる」と「おちる」の語幹がどちらも …… 「お-」

「たべる」と「ためる」の語幹がどちらも …… 「た-」

※ 国文法・学校文法のいわゆる活用表の学問的なレベルの低さは

——音声現象への認識の大きなあやまりから——

——単語の文法的な形式への認識のし方のあやまりから——

日本語の不規則変化動詞は2つだけ!

〈来る (くる)〉		〈する〉	
来ない (こない)	konai	しない	sinai
来ます (きます)	kimasu	します	simasu
来る (くる)	kuru	する	suru
来い (こい)	koi	しろ	siro
来よう (こよう)	koyô	しよう	siyô
きません	kimasen	しません	simasen
きた	kita	した	sita
きなさい	kinasai	しなさい	sinasai
きましよう	kimasyô	しましよう	simasyô
こなかった	konakatta	しなかった	sinakatta
くるな	kuruna	するな	suruna

※ この2つの動詞だけは、「語幹」が母音でおわっているか、子音でおわっているかというグループ分けでかたづけることはできない。変化形のなか

で共通している部分は、それぞれ、〈k〉〈s〉であることはたしかでも、それを「語幹」とは呼べない、「不規則変化動詞」としか言いようがない。
（「一段変化動詞」のひとつのバリエーションのような側面もあるが……）

日本語の動詞の過去形にも音声現象としての5つのタイプがある！

——きわめて規則的なタイプ！——

[確認の作業 ③] 動詞の過去形の音声的なタイプ

※ つぎの動詞の過去形をよく観察したとき、音声的にどういうタイプがあるか？

（実際に発音してみて、音声現象としてたしかめる。ローマ字でかいてみる）

【日本語の過去形】

【どういうタイプが?】

こわした・はずした・はなした・おとした
たたいた・くだいた・かいた・おいた・まいた
およいだ・かついだ・またいだ・かいだ
はしった・とまった・ねむった・すわった
わらった・つかった・かった・たった・まった
ころんだ・はこんだ・きざんだ・たたんだ



（空欄のボックス）

動詞の過去形の5つのタイプをつくりだすのは、変化形の語幹の「子音」のちがいで！

(むかしの過去形) kowas-itari

(いまの過去形) kowas-ita

[語幹の子音] — (s)

【原則的】

まわす まわした

こわす こわした

なくす なくした

おとす おとした

(むかしの過去形) tatak-itari

(いまの過去形) tata-ita

[語幹の子音] — (k)

【イ音便】

あるく あるいた

やぶく やぶいた

なく ないた

うなづく うなずいた

(むかしの過去形) katug-itari

(いまの過去形) katu-ida

[語幹の子音] — (g)

【イ音便】

かつぐ かついだ

およぐ およいだ

こぐ こいだ

とぐ といだ

(むかしの過去形) hasir-itari

(いまの過去形) hasitta

[語幹の子音] — (r) (t) (w)

【促音便】

はしる はした

まわる まわった

かつ かつった

たつ たった

わらう わらった

つかう つかった

(むかしの過去形) hakobitari

(いまの過去形) hakonda

[語幹の子音] — (m) (n) (b)

【撥音便】

よむ よんだ

ちぢむ ちぢんだ

しゃがむ しゃがんだ

しぬ しんだ

ころぶ ころんだ

はこぶ はこんだ

- ※ このような「音便変化」の現象は動詞の語彙的な意味にはかわりなく、日本語の動詞の変化形における、純粹に「音声現象」としての規則性!

この課の授業のあとの学生たちのまとめは、次のようである。

- 今回の授業では、動詞の変化と分類について学びました。動詞の活用の規則性についてが主でしたが、音（ローマ字）で判断すれば、語幹という概念がすぐわかるというのは、前回に引き続き、とてもわかりやすかったです。さらに今回は、「語幹は子音で終わる」という前回の授業で登場した説明に当てはまらないものが登場しました。音や普通の使い方では違いは何となくわかっていても、高校までの学習では「上一段活用」や「下二段活用」といった難しい言葉で習い、活用は「え・え・う・うる・うれ・えよ」などと覚えさせられたものが、音（ローマ字）で語幹を考えると2種類になりますという、とてもシンプルなものにおさまり、とても驚きました。それが、いわゆる五段変化と一段変化のことだとどとどと理解し、文法が本当はわかりやすい基本的なものだと実感しました。また、「言語の本質が音声である」という真理が、授業を終える毎に納得できるものとなっています。(Karin.W)

- 「買う」や「笑う」などの動詞の変化形において、実は「wi・wu・we・wo」の発音が存在していたが、現代日本語ではそれらの「w」の音が脱落していて、否定形の「-wanai」の形でしか子音の「w」が存在しないという事実は、今回の授業を受けて初めて知ることができました。また、授業の中で動詞をAまたはBのグループに分類するというを行いました。最初は何を基準に分類しているのかが全く分かりませんでした。しかし、それらのグループの違いが、語幹が子音でおわるか・母音でおわるかの違いであることを知って、これは、日本語の「い」or「う」or「え」のどの母音でおわるかだけで動詞を分類することを今まで習ってきた私にとっては、「切る」と「着る」は上一段活用で同じグループであると思っていたし、漢字を使わなければ区別できないと思っていたので、とても衝撃的な事実でした。 (Ayaka.T)

- 今日は動詞の語幹について詳しく学んだ一時間だったと思います。語幹に注目して、子音まで区別することで、こんなに動詞を区別できるのかと驚きました。今までの語幹のとらえ方だと、「切る」も「着る」も語幹は「き」で、わざわざ語幹・語尾を区別する必要はあるのだろうかと思ってしまいますが、子音まで区別すると、わざわざ漢字で書かなくても、2つの動詞を区別できて、とても理解しやすいです。改めて今まで習ってきた学校文法に疑問を感じました。「言語の本質は音声」ということに着目した言語の授業を、もっと広く行なうべきだと思いました。私は、先生のこの授業をうけて、音声現象に着目するという観点を得られて本当によかったです。わかりやすい授業をありがとうございます。 (Nanako.T)

- 今日習った動詞の変化では、終止形とはただう段で終わるものではなく、文の陳述性をひきうける述語として文を完結させるものであるということがわかりました。また、変化形をローマ字表記にして書き並べる

ことで、語幹が子音まで含まれるということは前回習ったのですが、今回新しく母音まで含まれるものや「言う」などの「w」の発音が消失した形のものがあるという発見をしました。他にも、今まで習ってきた変化形の意味だったり、日本語の不規則変化動詞は「来る」と「する」だけだということがわかりました。五段変化と一段変化を A・B で分けたものは、先生の説明があるまで気づけなかったもので、もっともっと動詞の本質的な部分を理解して、相手に説明できるくらいになりたいです。

(Minami.N)

- 変化形の体系について、終止形は文の最後にくるから終止形というわけではなく、述語として文を完結させ、文の陳述性をひきうけることを学んだ。先生が授業中におっしゃっていたことで「体系は脳みその反映」という言葉が印象に残りました。また、語幹の子音が9つしかないことに驚きました。たくさんの動詞の具体例を用いて、2種類の「る」でおわる動詞の分類を理解するのはすこし難しく感じました。否定形や命令形に変換した考え方は、沖縄出身のせいかわ少し混乱しました。変化しない部分を語幹というのではなく、語幹は語彙的な意味をひきうける部分であることのために、2つの動詞だけは不規則変化としてとらえることに納得しました。他人に動詞のことを説明できるくらい、理解できるようになりたいです。

(Natsuki.S)

- 異なる考えがあったときに「見解の相違」では学問が進まないという話は、確かにその通りだと思いました。その考えをそのままにせず、納得することがさらなる発展に必要な不可欠だと私も考えます。今日の講義でも語幹について学びましたが、「w」のおとが例えば「買う」などについてなくなっている点で日本語の変化を改めて自覚できました。また、A と B に単語を分類するとき、私はまったく分からなかったので、語幹が「子音」または「母音」で終わっていることで分類していると聞いた時は、動詞の語幹の複雑さを感じました。他の人が A と B の分け

方について「上一段・下一段」などと言っていましたが、私は学校で習っていたにも関わらず本質が分からず思い至らなかったので、やはり本質を学ぶことが大切だなと思い、これからもそのような意識をもち、講義をききたいと考えます。(Mika.O)

- 先週のふり返りで、変化形それぞれに体系があることを改めてしることができ、詳しく分かるようになった。語幹はただ変化しない部分ではなく、「単語の同一性を保証する」もので、語尾も「文法的な役わりの同一性を保証する」ものであることを知ることができる。「ぬ」で終わる動詞が「死ぬ」しかないことが分かった。とてもおどろいた。さらに、不規則に変化するものは2つしかないってことにもおどろいた。また、語幹や語尾の分け方は音声だけで分けてはいけないものであって、語幹や語尾の意味をしっかり把握して分類しないといけない。今まで学校で習った文法は、世界的に見るとまちがっていることが多いので、世界に合わせて日本語という言語を学んでいかなければならないと感じた。

(Syuhou.R)

- 動詞の変化形について、終止形について最初に学びました。終止形は述語として文を完結するものであり、陳述性をひきうけるものだと思えることができたので自分の為になりました。動詞の変化形の語幹の子音の種類は9つだと知り自分的には意外に少ないなあと思いました。子音が「w」があることも驚きでした。「る」でおわる動詞において、2つにわけられることを知り、納得し、理解することができて良かったです。未然形にしか「r」があらわれるものとあらわれないものがあって、考えてみればそうだなあと思いました。不規則動詞は「来る」と「する」だったので、これはなじみがあったのでやりやすかったです。次回の授業も期待します。

(Tomomitsu.O)

- 今回は前回に引き続き動詞の変化形についてやりました。動詞の変化

形の語幹のさいごの子音の数を数えようと思ったことはなかったのですが、8個と今日知ることができました。もっとありそうだと思って考えましたが、やはりみつからなかったです。今日の授業で一番驚いたのは、「食べれ」や「やめれ」は正しい命令形の形ではないということです。私自身は普通に使っていたのですが、たしかに活用を考えると正しくないなど実感させられました。(Yurika.Y)

● 【日本語の動詞の語幹は子音まで!!】

ここでは、前回の講義の復習をしながら、語幹のさいごの子音の種類について学びました。「s・k・r・g・b・m・t・n・w」の9つの種類があることを知った。

【日本語の動詞の変化形には2つのタイプがある!!】

その2つのタイプが「五段変化動詞・一段変化動詞」であることを知った! (学校文法よりもシンプル、かつ、わかりやすかった) また、「漢字をつかわなければ区別できない!」ってことはないことを知ることができた。たしかに活用の仕方と同じ音の動詞も異なるものになっていた。

※ 命令形で「ろ」をつかうのが、沖縄県民として逆に違和感……。(Junichi.U)

- 「ゐ」と「ゑ」という文字について、日常生活で使ったことは一度もないし何の為に存在しているのだろうと疑問に感じていたので、昔はこの2つの字に対応する音も存在していたという話がとても興味深かったです。また、おなじ「きる (切る・着る)」でも、ていねい形や否定形にすると「きます」と「きります」・「きない」と「きらない」のように違う形をとるというところが、今まで意識したことがなかったので面白かったです。こういった同じ読み方をする単語は、漢字を見て区別するものだと思っていたので、変化形が別であるというのが新しい発見でした。(Mikana.I)

- 今回は前回に引き続き「動詞の変化形」について学びました。「動詞の語幹は子音まで」というのは前回学びましたが、「たべる」「すてる」などの動詞はまた違った性質・変化を持っていることを新たに知りました。「動詞には語幹が子音までのグループと母音までのグループがある」ということを知りました。動詞の活用はもっと単純だと思っていました。高校で習ったものこそが全てだと思っていました。しかし、まだまだ私達が知らない動詞の側面があってどんどん知りたいなと思いました。また、日本語の特徴や性質を知らなくても毎日当たり前のように日本語を使っている日本人に対して、少しどこか悲しくなりました。日本語を日常的に使う者として、日本語の本質を100%理解できないとしても、学ぼうとする姿勢が大事だなと感じました。(Jyou.Y)

- 今日の講義もありがとうございました。いつもお疲れ様です!!今日は先生もすずしそうな姿で授業をしていて、聞く方も快適だったので集中して授業をきくことができました。最近の授業では復習の時間が減ってきているので、コメントシートと授業でのプリントをみながら復習にもとりくんでいきたいと思います。今日の授業では、上一段活用など今まで習ったものが一瞬だけできてきましたが、先生が未然形って何だ?と言ったときに、今まで疑問に思わなかったことがはずかしくなりました。これからはしっかり考えながらとりくみ、本来の真理について考えていきたいです。(Hiroko.T)

- 今日の授業で例に挙げた「買う」という動詞の場合、「かいます・かう・かえ・かおう」では、一見「w」が脱落しているように見えるが、否定形にしてみると、「w」が発音されるということが分かり、面白かった。「wu」などの発音の文字がないのは、それらは奈良時代以前から発音されていなかったからだを知り、ばるほどと思った。沖縄独特の言い方で「やめれ」や「着れ」などの命令形を「え段」で言うことがあるの

は知っていたが、秋田でもそのような言い方をするというのは初耳だった。前回同様、活用形をローマ字で表してみると、語幹が母音でおわっているか、子音でおわっているかが重要だということがわかった。

(Mika.I)

【第11回】 動詞の文法的なかたち（その3）

音声的な本質にもとづいて、日本語の動詞のもつ規則的な姿を確認したところで、この授業では、学校で強制的に丸暗記させられている国文法（学校文法）のすがたを具体的にひとつひとつ例をあげながらさしだす。学生たちが自分の目で客観的にみつめていくことの大切さである。世界の学問のレベルで、語幹と語尾の普遍的な規定にしたがって日本語の現象をとらえ、そして、その目で国文法のある現況をあらためて客観的にみつめるとどうなっていくかということである。五段変化動詞の語幹と語尾のくぎりについては、ひらがなでとらえているから子音までくべつできない、というふうにしつづけるのは同情してもいいのかもしれないが、一段変化動詞のばあいは「たべる」と「ためる」という動詞や、「おきる」と「おちる」のような動詞をみてみれば、ひらがなでかいても、それぞれ、語幹が「たべー」「ためー」、「おきー」「おちー」と小さい子どもでもくべつできる。しかし、国文法（学校文法）では、それを、こともあろうに、それぞれの語幹を「たー」「たー」、「おー」「おー」といい、そして、それぞれの語尾を「べ・べ・べる・べろ」と「め・め・める・めろ」、「き・き・きる・きろ」と「ち・ち・ちる・ちろ」という、あのいまわしく、あわれな姿で子どもたちにおしつける。テストというおどし文句のもとに丸暗記こそすれ、日本語の姿として納得して理解するはずもない。科学的な学問というかけらもない。授業のなかで、世界の言語学の普遍的概念としての『語幹とは何か』『語尾とは何か』という規定をおしえもせず、考えることもせずに、ただうのみにする訓練に終始している授業のなかでしか通用しな

いだろう。「語幹というのは単語の変化しない部分」・「語尾というのは単語のしっぽの部分」という認識のレベルの国語学の反映である。

ここには、世界の学問のレベルで「単語とは何か」という普遍的な規定に真剣にむきあう姿勢が欠落している。後生大事に江戸時代・明治時代からの「大國語学者」の遺産を形骸的にまもる怠慢の姿だけしかない。単語とは音声（音声の連続）が意味とむすびついたものである。そして、単語はみずからの語彙的な意味をもちながら、同時に、文のなかで他の単語とむすびつく能力をかねそなえた存在である。すなわち言語活動（認識活動・思考活動）の基本的な単位としての「文」のなかではたらく、言語の単位としての「単語」はその存在のはじめから「語彙と文法の統一物」なのである。名詞という単語が、格変化などのさまざまな文法的なかたちの体系のなかに存在し、語彙的なものと文法的なものを統一させた存在であるのとおなじように、動詞という単語もまた、みずからのなかに語彙的な意味内容を持ち、同時に文のなかでの役わりに応じた文法的なかたち（変化形）のなかの存在である。

国文法（学校文法）は、何よりもまず、単語の存在にとって大切な、かんじんの語彙的な意味をひきうけるはずの「動詞の語幹」を音声的に破壊している。そして、単語のしっぽの部分と彼らがとらえているはずの「動詞の語尾」もまた音声的にも文法的な役わりの点でも主観的にきりきざむ。学問的にも低レベルの形態素論しかない。国文法（学校文法）にあるのは、表面的な新しがりの構文論だけで、形態論がない。音声をベースにしたモルフォロジー（形態音韻論）もない。ひらがなだけの表面的な形態素だけのきりきざみの反映が、国文法（学校文法）の活用表となってあわれな姿を化石のようにさらしている。まさしく、負の世界遺産である。

「見解の相違です」といって、問題の指摘に対して真剣に耳をかさなければ、どの分野の学問でも社会生活でも進歩も発展もないのだが、学生たちは、それでもやさしい心で「どうしてこういう活用表ができたのだろうか」と、ただ突き放さずに問題の本質的な原因をさぐろうとしてくれる。根本的には、単語の認定に対するレベルの低さにあると言ってしまうとそれだけなのだが、もう少し具体的に言えば、学校文法でいうところの、いわゆる「助動詞」なるものを

かたくなに既得権としてゆずらずに、ひらがなで独立させて「単語」として主観的に解釈しているだけのことである。

およそ、動詞が規則的に『総合的な文法的な変化』をする言語（ドイツ語・フランス語・ロシア語・日本語・朝鮮語など）においては、その変化語尾というのは、母音交替による屈折的な変化と接尾辞（suffix）のつけたしによる膠着的な変化とがあって、たいていの言語はこの2つのタイプをくみあわせて、たくさんの実にさまざまな、「1単語」としての文法的なかたちを形成している。日本語もまた、音声的にみれば、「kowas-u・kowas-e・kowas-ô・kowas-i」のような五段変化動詞の屈折的なタイプと、「kowas-ita・kowas-anai・kowas-imasu・kowas-eru・kowas-aseru・kowas-areru」のような膠着的なタイプとをくみあわせて、文のなかでのさまざまな陳述的な役わりをひきうけた体系をつくりあげている。一段変化動詞のばあいは、「tabe-ru・tabe-ro・tabe-yô・tabe-」であったり、「tabe-ta・tabe-nai・tabe-masu・tabe-saseru・tabe-rareru（tabe-reru）」であったりと、膠着的な接尾辞（suffix）のつけたしのタイプで整然とした変化形の体系をつくりあげている。「屈折的なタイプ」と「膠着的なタイプ」とのくみあわせの、「1単語」としての『総合的な文法的なかたち』の体系である。そして、ヨーロッパ諸言語や日本語や朝鮮語のように、このようなゆたかで、はなやかな総合的な変化形をもつ言語であっても、文のもつたくさんの構文論的な役わりをはたすために、動詞は形式的には2単語や3単語からなる『分析的な文法的なかたち』も発展させている。英語であれば、「will go・can go・have gone・is walking」などであり、日本語であれば、「あるいて いる・たべて しまう・やって みせる・つくつて もらう・かして あげる・よんで おく・こみあげて くる・うすれて いく」などである。これらの分析的な文法的なかたちは、助動詞と本動詞とのくみあわせで2単語による「ひとつの文法的なかたち」である。「助動詞（auxiliary verb）」というのは、「本動詞（main verb）」がその語彙的な意味をうしなってもっぱら文法化した単語のことであり、動詞の総合的な変化の語尾（接尾辞・suffix）とはレベルがことなる存在である。「助動詞」も語彙的な意味をうしなってもっぱら文法的な役わりに専念する存在であると、それが音声的に短縮して、

1 単語性をたもつことをやめ、「あるいてる・ねてる・つくっとく・しめとく・とおのいてく・かえってく」などのように、接尾辞化 (suffix 化) が進行していく。国文法 (学校文法) は、こういった世界の言語の普遍性のもとで、客観的に日本語の言語現象をとらえることげできずに、総合的な変化形における接尾辞をあたかも「国語の特質」であるかのように、1 単語の「助動詞」とよびつづける、世界の学問からとりのこされたあわれな存在にしかすぎない。世界の言語学の普遍的な概念としての、ほんものの「助動詞 (auxiliary verb)」の存在を日本語の言語現象のなかに見いだしても、化石的な大先輩の主観的な解釈学説の目がこわくて、それをあらためることもできずに「補助動詞」なる用語を勝手にひねりだしても、そんなことで世界の学問にうけいられるはずもない。「助動詞」と「補助動詞」とを世界の学問の用語で翻訳しわけるとでもいうのか。

文法論の2つの分野である「構文論」と「形態論」は両輪として互いを前提として発展している。現代の発展した言語学では、「形態論・morphology」の対象もまた、単語の内部のつくりとしての「形態音韻論・morphology」的な側面という規定ばかりでなく、文のなかでの単語の存在形式を研究する学問分野として、単語の「分析的なかたち」も対象にしているし、さらには語順もまた単語の存在形式として研究の視野に入れながら、構文論と形態論の相互関係のなかで、いっそう発展をつづけている。江戸時代のくびきからいまだにのがれられず、「形態論」という世界の普遍的な学問分野の用語を教室のなかにもちこむことをゆるさない、国文法 (学校文法) の現実を役人と御用学者たちだけがほめそやし、矛盾を感じている子どもたちの口を封じ込め、テストでくするしめ、子どもたちの真の日本語教育と外国語教育の真の発展をさまたげている。口先だけのグローバル教育である。

国文法 (学校文法) の活用表における愚劣な語幹と語尾のくぎり方の原因に話をもどせば、それは実に単純な子どもじみた理由である、ひらがなで文法的な接尾辞の部分を、まず治外法権のように既得権としてとりだして、独立の1単語として切りはなし、のこった部分を単語といい、さらに世界の学問のなかには、「語幹」と「語尾」なるものがあるそうだから、そちらの内部の問題と

して勝手にふたつに分けてみたらいいんじゃない。とまあこんな具合である。本末転倒というのはこういうことを言うのである。文法的な接尾辞をきりとったあとに、のこりをさらに語幹と語尾にわけるとなれば、単語の語彙的な意味を無視してまでふたつに区切らざるをえない。何やら変化しない部分が「語幹」というそうだから、とりあえず、「たべる」の「た」の部分語幹ということにして、のこった部分の「べ・べる・べろ・べれ」あたりを語尾にしようか。何かおかしいなあ。でも、「ない・ます・た・う（古代は〈む〉だそうだけど）」というのは、助動詞として別の単語だから仕方ないか。まあ、こういうことにしよう。世界のレベルでの学問として、自分たちの言語に向き合えないと、こういうふうには、意味内容を無視して形式的にきりきざむだけになる。まるで、3人きょうだいでケーキを分けるときに、一番上のらんぼうなお兄ちゃんがまず半分をとってしまって（助動詞）、のこりの半分を下の弟と妹がわけている（語幹・語尾）ようなものである。一段変化動詞の活用表のあほらしさは悲劇的である。ゼロ語幹（語幹のない動詞）という主観的な解釈は、もともと子どもたちの理解の域をこえている。そして、まことしやかな「助動詞の研究」などというのも、単語の語彙的な意味を無視した、構文論的な機能からもかけはなれた、「きりきざみごっこ」の主観的な解釈である。単語の文のなかでのほんとうの文法的な意味というのは、単語の語彙的な意味のタイプ（カテゴリーカルミーニング）と文法的なかたちを統一させて考えなければ、結局は主観的な解釈にまかされるしかない。「学校文法は古典の文章をよむときには役にたつ」といまだに言い張る御用学者もいるが、ひらがなによるにせ形態素主義からのよみとりは眉つばものである。そのレベルでのよみとりにしかすぎない。結局は自分たちのひねりだした国文法ではよみとれず、文脈と単語の語彙的な意味にたよらざるを得なくなり、さいごは、「やっぱり文法だけではよみとりはできない」とほざく。学問としての体をなしていないのが国文法である。子どもたちにとって迷惑きわまりない。単語における語彙的なものと文法的なものとのきりはなしの悲劇は、名詞からの「いわゆる助詞」のきりはなしとも共通している。名詞を「活用しない自立語」として勝手に解釈し、「助詞の研究」と称して「が」や「を」や「で」や「に」に何かの意味があるかの

ようにまことしやかにうそをつく。接尾辞のついた名詞の文法的なかたち全体が、その語彙的な意味と文のなかでの他の単語との関係のなかで意味をもつのである。学校文法の動詞の活用表の愚劣さは、名詞の接尾辞（くっつき）を「助詞」という1単語としてとりだすこととおなじ根っこである。

この課の授業は、つぎのようなプリントをつかっておこなった。

動詞の語幹と語尾の区切り方の浅さが

単語の認定のし方のまちがいへと！

—単語の「文法的な形」とは何か？ という言語学の普遍性からはずれていることが、国文法（学校文法）の未熟さの本質—

[確認の作業 ①] 日本語の動詞の変化形の語幹と語尾の本当の姿と
学校文法で暗記させられてきたことをくらべる

※ つぎの動詞の変化形の語幹はどこまでか？ その語幹のさいごの「子音」をローマ字でかいて、音声現象としての日本語の本当の姿を確認する。

【まず、学校文法で暗記させられてきたのは？】

	〈たたく〉	〈たたむ〉	語 幹	語 尾	助動詞
[否 定]	たたかない	たたまない	たた-	(か)(ま)	ない
[ていねい]	たたきます	たたみます	たた-	(き)(み)	ます
[基 本]	たたく	たたむ	たた-	(く)(む)	
[命 令]	たたけ	たため	たた-	(け)(め)	
[さ そ う]	たたこう	たたもう	たた-	(こ)(も)	う

【日本語の動詞の変化形の本当の姿は？】（音声現象として子どもでもわかる）

	〈たたく〉	〈たたむ〉	語 幹	語 尾	助動詞
[否 定]	たたかない	たたまない	tatak-	tatam-	-anai
[ていねい]	たたきます	たたみます	tatak-	tatam-	-imasu
[基 本]	たたく	たたむ	tatak-	tatam-	-u
[命 令]	たたけ	たため	tatak-	tatam-	-e
[さ そ う]	たたこう	たたもう	tatak-	tatam-	-o

※ 実際に〈ころぶ〉と〈ころす〉という2つの動詞でもう一度たしかめると？

【まず、学校文法で暗記させられてきたのは？】

	〈ころぶ〉	〈ころす〉	語 幹	語 尾	助動詞
〔否 定〕	ころばない	ころさない	() -	() ()	()
〔ていねい〕	ころびます	ころします	() -	() ()	()
〔基 本〕	ころぶ	ころす	() -	() ()	
〔命 令〕	ころべ	ころせ	() -	() ()	
〔さ そう〕	ころぼう	ころそう	() -	() ()	()

【日本語の動詞の変化形の本当の姿は？】（音声現象として子どもでもわかる）

— 語幹と語尾をローマ字でかいてみると —

	〈ころぶ〉	〈ころす〉	語 幹	語 尾	助動詞
〔否 定〕	ころばない	ころさない	() -	() -	- ()
〔ていねい〕	ころびます	ころします	() -	() -	- ()
〔基 本〕	ころぶ	ころす	() -	() -	- ()
〔命 令〕	ころべ	ころせ	() -	() -	- ()
〔さ そう〕	ころぼう	ころそう	() -	() -	- ()

※ 「かく」「かす」「かむ」という動詞の変化形でたしかめても、これらが別々の語幹をもち、まったく別の動詞であることは、文字をしらない小さな子どもでも音声として認識して決してまちがうことはない。そして、語尾は音声現象としても完全に同一である。

【語幹の共通性が単語の同一性を保証する】

【語尾の共通性は文法的な役わりの同一性を保証する】

この言語学におけるごく普遍的な常識の欠如が学校文法（国語学・国文法）の未熟さ（学問的なレベルの低さ）をつくる。そして、

日本語のなかにもありもしない無用の概念《助動詞》というものを一単語として勝手にひねりだす。

— これは動詞の変化語尾の一部（接尾辞・suffix） —

※ 一段変化動詞の変化形の語幹はどこまでか？ 語幹が母音でおわっているはずなのだから、ひらがなでかいても、その区切り方をまちがうはずがないのに！

【まず、学校文法で暗記させられてきたのは？】

	〈おちる〉	〈おきる〉	語 幹	語 尾	助動詞
〔否 定〕	おちない	おきない	お-	(ち) (き)	ない
〔ていねい〕	おちます	おきます	お-	(ち) (き)	ます
〔基 本〕	おちる	おきる	お-	(ちる) (きる)	
〔命 令〕	おちろ	おきろ	お-	(ちろ) (きろ)	
〔さ そ う〕	おちよう	おきよう	お-	(ちよ) (きよ)	う

【日本語の動詞の変化形の本当の姿は？】 (音声現象として子どもでもわかる)

	〈おちる〉	〈おきる〉	語 幹	語 尾	助動詞
〔否 定〕	おちない	おきない	oti-	oki-	-nai
〔ていねい〕	おちます	おきます	oti-	oti-	-masu
〔基 本〕	おちる	おきる	oti-	oti-	-ru
〔命 令〕	おちろ	おきろ	oti-	oti-	-ro
〔さ そ う〕	おちよう	おきよう	oti-	oti-	-yo

※ 実際に〈たべる〉と〈ためる〉という2つの動詞でもう一度たしかめると？

【まず、学校文法で暗記させられてきたのは？】

	〈たべる〉	〈ためる〉	語 幹	語 尾	助動詞
〔否 定〕	たべない	ためない	() -	() ()	()
〔ていねい〕	たべます	ためます	() -	() ()	()
〔基 本〕	たべる	ためる	() -	() ()	
〔命 令〕	たべろ	ためろ	() -	() ()	
〔さ そ う〕	たべよう	ためよう	() -	() ()	()

【日本語の動詞の変化形の本当の姿は?】(音声現象として子どもでもわかる)

	〈たべる〉	〈ためる〉	語 幹	変化語尾
〔否 定〕	たべない	ためない	() - () -	- ()
〔ていねい〕	たべます	ためます	() - () -	- ()
〔基 本〕	たべる	ためる	() - () -	- ()
〔命 令〕	たべろ	ためろ	() - () -	- ()
〔さ そ う〕	たべよう	ためよう	() - () -	- ()

※ ここまでくると、学校文法（国文法）の愚劣さのきわみです！

この課の授業のあとの学生たちのまとめは次のようである。

- 今回の授業で、語幹というものについて改めて考えることができたと思います。「おちる」「おきる」の語幹が「お」であると教育の場で教えられている現状に危機を感じました。これから動詞を考える時は、語幹を「変化しない所」ではなく、「動詞の意味を表す所」だと意識していきたいです。助動詞という概念が今の日本の国語教育にはまだまだ根深く残っていますが、私は、私のまわりだけにでも、この授業で学んだことを広めていきたいなと思いました。おもしろかったです。

(Moeka.K)

- 今回も、これまでの常識を打ちくだくような授業でした。助動詞として覚えさせられたものは全くの無駄だったという事実が悲しいような嬉しいような気持ちです。理系の私としては、言語の法則がよりシンプルに、体系的に表せることを知って、気持ちいいなあと思いました。ここまでくると本当に小中高の国語の授業の文法理解は何だったんだろうと思います。今まで疑問を持たずに語幹をひらがなのままで捉えていたのを、ローマ字に分解して捉えなおし。そして助動詞の考え方から接尾辞の考え方に変えることが、ここまで理解の助けになることに感動しています。視点のとり方を変えることは大事だなと思いました。(Eri.O)

● 今日は動詞の語幹と語尾の区切り方について勉強して、学校文法では「おちる」と「おきる」の語幹はどちらも「お」で、語尾は「おちる」なら「ち」、「おきる」なら「き」になっていて、自分が中学生や高校生の時には、それをそのまま覚えていたのかもしれませんが、多分、無心で丸暗記していたんだろうなと思いました。日本語を勉強する外国人にとっても、日本語を学ぶ子どもたちにとっても理解のできない、ただただ覚えさせられるだけのものはやっていて楽しくもないし、理解を妨げてしまうだろうなと思いました。(Rino.A)

● 今日は、今まで学校文法で習ってきたことと、この授業で習った「語幹」「語尾」の概念を比べてみて、改めて日本の国語学の遅れを感じました。村上先生がやっているように音声現象としてとらえると、日本語の本質を理解できるように思います。子どもの頃から音声として理解してきた、語幹や語尾として体得していたものを小学校中学校ではその認識を折り曲げてまで教えられるので、子どもは国文法が嫌いになっていくのだと思います。中学校の頃、私の友達は国語の文法がわからずとてもうんざりしていたので、その子にこの授業で学んでいたことを教えてあげたいです。語幹・語尾をしっかりみることで、こんなに動詞の見方が変わるとは思いませんでした。音便についてもわかりやすかったです。質問なのですが、村上先生は古典文法についても研究しているのでしょうか？私は個人的に現代語よりも古語のほうが暗記事項が多く、苦痛でした。(でもセンター試験にもでるので避けられなかった……)古語の動詞も同じように語幹などを意識すれば見え方変わりますか？(もちろん!同じことです。変わります!……M) (Nanako.T)

● 動詞の過去形を日本人であれば、感覚的に区別することはできるけど、その内的な違いは『語幹』であること、そしてやはり日本語はもちろん、言語の本質は音声であることを、前回と今回の授業を通して学ぶことができました。私たちは日本人であるにも関わらず、母国語である

日本語の正しい動詞の変化形を知らずに、日本語を話して生きていることにとっても恥ずかしくなりました。日本人の主観的な考え方が、教養を身につけるための重要な時期である義務教育での国語教育（日本語教育）にも影響しているのかと考えると、とても残念でなりません。また、過去形の分類において、昔と今で同様な変化をする〔原則的〕な (s)、〔イ音便〕の (k)・(g)、〔促音便〕の (r)・(t)・(w)、〔撥音便〕の (m)・(n)・(b) と、言語が音声であるがゆえの規則性に基づいて、このように明確にグループ分けをすることができるということ、そして、日本語の文法において重要だと思っていた助動詞が実はそうではないということを経験して、今回の授業でしっかりと理解することができました。(Ayaka.T)

- 今日の授業では、語幹の本質と子音の分類について、前回に引き続きより詳しく学びました。単語の過去形には法則がありますが、いくつかの種類があります。「ita」をつけるベーシックなもの・イ音便・撥音便・促音便の4つです。しかし、平安時代くらいのは昔は、「itari」をつけるという非常に単純な原則しかなく、時代と共に発音しやすいように変化してきてただけのものでした。また、高校で学んだ日本語表記の語幹・語尾にどれだけ矛盾があるかも納得しました。高校時代にあれだけわかりづらかった活用語尾の規則性も、ローマ字表記にするだけで、一発でわかりやすくなりました。こうすることで、原形（基本形）の読み（音）が同じ単語でも語幹や活用が変わったりして、「語幹の共通性が単語の同一性を保証する」ことを実感しました。9種ある語幹末尾の子音による分類と、ローマ字表記による規則性を生かして、改めて高校時に学んだ文法や文章を読み返したいと思いました。(Karin.W)
- やはり平仮名で語幹と語尾を分けるよりローマ字で分けた方が分かりやすく、より納得させられました。語幹が単語の語彙的な意味をひきうけているのに、一段変化動詞の語幹が「お」「た」と、一文字しかないのは少し（まったく）違和感を持ちました。イ音便も、iがつくからイ

音便なのではなく、iの前の子音が抜けて、iが目立っているからそう呼ばれていることなど、誤解していたことに気づけて良かったです。今回の授業で一番印象に残っていることは、動詞の過去形だったんですが、英語と日本語の動詞の過去形を比較した時に、「kowa/si/ta」（語幹 / 語尾 / 助動詞）で分けている学校文法の日本語は、分けて考えない英語より複雑で分かりにくく、もともと分ける意味があるのか、と感じました。同じように、所有格も「犬 / の」のように2つに分けて考えていることに少し（とても）疑問を持ちました。（Rina.K）

- 今まで語幹はただ単に共通している部分を指していると思っていたので、語幹を（末尾の）子音のちがいで考えているのはすごく新鮮です。また、語幹が語法的な意味をもつということを見ると、学校で暗記させられていた語幹は全然意味が相手に通じず無駄なことを覚えさせられたなと感じました。国際化ということが大きなテーマとなっている今、学問の面でいつまでも今までの方法に固執して世界から見捨てられるわけにはいかないと思いました。余談ですが、先生が初めに話していたバイリンガルの定義を私はまちがって覚えていたので、それを訂正できてよかったです。（Eri.G）

- 今日も暑いなか講義をしていただき本当にありがとうございます。先週の授業を欠席したせいで、授業の内容についていけるか心配でしたが、相変わらず丁寧な授業の進め方をして下さったので分かりやすかったです。今日の講義の内容は理屈で考えるものが多いと感じました。語尾や語幹の話がほとんどだったけれど、それ以外に先生がおっしゃっていた『日本では通用するけれど外国には通用しないといったようなことは有り得ない』そして『外国に通用しないものは、日本にも通用しない。国文法（学校文法）が日本の子どもたちのだれからも受け入れられない、その姿が何よりの証明だ』と言ったのが、とても印象的でした。毎回、先生は刺激的な言葉をちょいちょい挟んでくれるので面白いです。来週もよろしくおねがいします。（Hikari.C）

- 前回に引き続き、動詞について学んだ。変化の体系を再確認し、学校文法において学んできた語幹と語尾の区切り方を、熟考せずにおこなっていることが問題であることを確認した。プラスαで学んだこととして、なぜこんなことが起こってくるかということを考え、「助動詞」の学校文法からみた視点があると思う。語幹と語尾とは何か?と問われたときに、本質を考えなければならない。イ音便についての考え方は、「イ」がついたのでなく、他のものが抜けたので「イ」が目立ってしまったという考え方はとてもおもしろいなと思った。日本語のしくみを客観的にみることが重要であることや、外国語を学ぼうえで役に立つことを学んだ。日本語を勉強する人に教えるときは、普段何の役にも立たない暗記ばかりの学校文法をおしえるのではなくて、役に立つ今日学んだようなことを教えられるようにしたい。(Natsuki.S)

- 私たちが普段意識しないで使っている言葉の変化を、日本語を学ぶ人々は法則を発見し学ぶという話を聞き、現象と法則の関係性をより深く理解することができました。また、語幹が「単語の語頭的な部分を引き受けている」にもかかわらず、「おちる」について、語幹を「お」と定義すると訳の分からない文ができるという矛盾を知り、改めて今まで学校で学んできたことが間違いであったと気づきました。動詞の活用形について、むかしと今の形を比較して音声としての音便が影響しているという点は、初めて学ぶことであり、興味深く感じます。今日の授業を通して、学校文法が「助詞」を「接尾辞 (suffix) ではなく、独立の単語とすることの必要性の有無について、先生の意見により深く納得できました。今後、新たな言語を学びたいと考えているので、その時は、授業で学んだことを生かしたいと思います。(Mika.O)

- 今日の授業もおつかれさまでした。ありがとうございました。動詞の変化形についての講義は今回で終了ということなので、今までの総復習を一通りやっておきたいと思います。音便の種類や語幹、語尾の変化に

ついて、中高で習ってきたようなことが今日の授業ではたくさんできましたが、今まで何も考えずに覚えてきたことが悔やまれます。何も考えなくても音便などを間違えないという点で、母国語って素晴らしいと思いました。私は、このように言語の本来の真理について探究していくような授業を小学校など幼いころから受けていたかったと思いました。次回もよろしくお願いします。(Hiroko.T)

- 母国語は「無意識のうちに身についた言語」ということを初めて知った。今まで間違っ**て**バイリンガルとかトリリンガルとか使っていた(笑)。今日の授業で、外国人が日本語が一番難しい**って**言う意味が少しわかった気がする。ちゃんと日本人にも外国人にも、日本語を世界レベルで学問的に教えれば、もっと文法に興味を持つし、外国人はもっと学びやすいんじゃないかなーと思う。実際、学問的に日本語をみると面白いし。今日の動詞の過去形についても意識せずに過去形を使っているが、なぜその動詞を過去形にした時、そういう形になるのかを、聞かれない**と**考えたことないままだし、考えてみたけど過去形にする際の内的な法則も全く考えが浮かばなかった。a・i・u・e・oで、ずっと考えてたけど、まさかの前回の授業でやった語幹の [s]、[k・g]、[b・m・n]、[r・t・w] の違いで区別されていると思わなかった。あと、口の形で考えてみると、まとまりがわかった。あれだけ学校で動詞の活用とか品詞分解を教えているのに、この法則はなんで教えないんだろう。こんなに面白いのに。国語の先生でもわからない人がいるのかな(笑)。イ音便も、「イ」がついたからじゃなくて、その前のものがぬけ落ちて**いる**ってことに気づかされた。ちゃんと見てたら気づくけど、習ったものをなんも疑いもせずにインプットしていた自分はだまされてました。日本語の動詞の変化形も、国文法でみるとその語幹からもとの動詞を連想すると(語幹「か」だと、「かく・かむ・かす・かる・かう」があるし、語幹「ころ」だと「ころぶ・ころす」があるし、語幹「たた」だと、「たく・たたむ」がある)、いくつかでてくるけど、世界レベルで学問的

にみると、同じものをさがせないし、これなら絶対 外国人も間違えないし、スゴイなと思った（けど、これが世界的には普通）。日本語を学問的にみると、今まで習ってきたよりキレイにみえる!! (Mona.T)

【第12回】 いわゆる学校文法における「文節」とは？

ここでは、単に単語の認定のし方の問題ばかりではなく、文法論における、さらには、言語学におけるそれぞれの分野の相互関係に対する根本的な認識のレベルの問題がある。単語の文法的な形式における接尾辞 (suffix) を、助詞や助動詞として1単語とするかどうかという表面的な見解のちがいのことだけではない。言語と言語活動の区別に対する正確な認識のあり方の問題である。言語活動の最小単位は文である。そして、言語の最小単位は単語である。単語を材料としてそれらをくみあわせて、連語や文をくみだてるのだが、その構築物としての文は、通達活動の単位としてはなし手のきき手に対する態度、かわり方を陳述性としてそなえている。そしてまた、文は、認識活動の単位として、思考活動の単位として現実に対する態度、現実に対するかわり方、現実のとらえ方も陳述性としてそなえている。これらのことが切りはなしがたくむすびつきながら、文は構築物として言語活動の単位となっている。

一方、単語は現実の断片をうつしとり、文の材料となりながら、文の対象的な内容である現実のものごとのあいだの関係のあり方を、その文法的なかたちのなかにさしだす。いいかえれば、材料としての単語は、構築物としての文の内部構造のあり方をその文法的なかたちのなかにあわせもつ。単語は、さまざまな文法的なかたちをとって、文のなかでのさまざまな部分としてはたらく。さらに、文のなかの単語は、はなし手のきき手に対する態度や、現実に対する態度や、現実の認識のし方など、文の陳述性のさまざまもまた、そのたくさんの文法的なかたちのなかにさしだす。単語は、現実をうつしとりながら、同時に、文のなかで他のものごととの関係や現実との関係をさしだす機能をもつと

いうことで、その存在のはじめから「語的なものと文法的なもの統一物」なのである。単語の文のなかでの存在形式をとりあつかう分野が「形態論」であり、それは当然、「構文論（構築物としての文を対象とする文論・単語と単語関係のあり方を対象とする連語論）」との相互関係のなかの存在である。「形態論（morphology）」は、「形態音韻論（morphophonology）」としての、語彙素や形態素などの単語の内部のつくり方をさぐっていくことが中心のように思われがちであるが、しかし、文のなかでの単語の存在形式のさまざまを研究する分野が「形態論」であるとすれば、屈折的な変化や接尾辞のつけたしによる「総合的な文法的な変化形」ばかりでなく、単語が語彙的な意味をうしなうて文化化した「助動詞」や「前置詞（日本語や朝鮮語では後置詞）」とのくみあわせによる「分析的な文法的なかたち」も、「単語の」形態論の対象である。文のなかに存在し、文のなかではたらく単語の存在形式を研究するのが形態論なのである。

このような単語の文法的なかたちを「形態素」に切りきざみ、suffix をあたかも独立の単語としての「助詞や助動詞」としてとりだし、そこに何らかの文法的な意味があるかのように記述してみても、実際には、文法的な意味というのは、語彙的な意味内容をもつ単語の、文のなかでの文法的なかたちのもつ意味や機能のことであるから、文のなかでの他の単語との関係のあり方や、単語のカテゴリカルミーニングや、文のもつ陳述性や、段落の構造のなかでの他の文との関係のあり方を考慮せずにはできるものでもない。suffix は、そのような1単語としての単語の文法的な意味のあくまでもひとつの形式的な表示者にしかすぎず、文法的な機能や文法的な意味をつくりだしているわけではない。語彙的な意味内容をもつ単語それ自体が、すでに他のものごととの関係のあり方をもって、それが文のなかでの文法的なかたちをとって文法的な意味をあらわすのである。だからこそ言語のちがいによって、おなじような文法的な意味が、さまざまなタイプの文法的な形式をとるのである。日本語の名詞だけが格変化をするわけでないし（朝鮮語もドイツ語もロシア語もする）、日本語の動詞だけが屈折変化や接尾辞のつけたしによる変化形をつくるわけでもない（英語もフランス語もドイツ語もロシア語も朝鮮語も）。さらには、名詞の文法

的なかたちとしての前置詞（後置詞）や、助動詞とのくみあわせによる動詞の文法的なかたちや、語順のあり方（中国語と英語だけが語順にきびしいわけではない。日本語も他の言語も語順はおなじように大切な文法的なかたちである）など、こういったさまざまな文法的な諸手段のくみあわせがそれぞれの文法体系をつくっている。それぞれの言語はそれぞれに個別的個性的であって、同時に人間の言語として普遍的である。日本語の特質というのは、言語それ自体の内的な音韻体系、語彙体系、文法体系のあたりまえのこととして個別的な存在なのであって、世界の学問からおくれた「助詞」や「助動詞」という主観的な解釈のし方に特質があるわけではない。人間の言語の普遍性のもとの個別性のことである。

単語を形態素に切りきざんでおもしろがっている姿は、小さな子どもがおもちゃを分解してそのふしぎをさぐってみようとして、そして、もう一度くみたてようとしてできないでいる姿と似ている。切りきざんで形態素ひとつひとつを単語と名づけてしまったつみほろぼしに、「文節」なるものをひねりだして、それを文を構成する単位とよんではみたものの、文法論としてはこれ以上は何もすすめないでいるのが国文法である。「文節」を文の部分らしいととらえてはみても、文のなかでそれらがどのように有機的な関係をつくり、文法的なかたちとしてどのように発展しているか考えようがない。「文節」が構造物の有機的な単位であるならば、文のなかでの存在のあり方としての「文節の文法的なかたち」を考えなければならないのだろうが、そんなことはきいたこともない。また、構文論としての文の構造についても、国文法では、主語と述語以外は修飾語、独立語だけである。なかみのない、形式的な修飾と被修飾（かざりとかざられ）の関係しかとらえられない。これが、「単語の認定」に対して世界のレベルで真剣に向き合わずに、「文節」という、かびの生えた、まやかしの主観的な解釈概念でごまかしつづけていることのアわれな結果である。

日本語のもつ「単語のゆたかな文法的なかたち」の体系も「文の内部構造のゆたかなしくみ」の体系も、そして、「構築物としての文それ自体」の体系も、世界の言語学研究からとりのこされている。文法研究といえば形態素の「助詞・助動詞」の研究しか頭にうかばない学校文法では、実際には、文学作品の

よみとりにも表面的なことしか役にたたず、深いよみとりになると、たくさんの読書量にものをいわせた経験的な主観的な解釈のたよるしかない。「古典の作品には、読みとりに役に立ちますよ。現代日本語にはあてはまらなくても、古典のよみにはとても有効ですよ」と声高に言っている人たちも、実際のところは、ある程度の手がかりになっているだけのことであって、厳密なよみとなると国文法は立ちうちできない。助詞や助動詞の意味にたよらずに、実際には単語の語彙的な意味や段落のなかでの文と文との関係を、いわゆる「文脈」とよんで解釈するしかなくなる。何よりも国文法・国語学の張本人たちが「文法だけでは深いよみとりはできない。文法は役にたたない」とのたまう。国文学者・国語学者が言語作品のよみとりに役だたないといっているようなものは学問的な役わりをなさないだろう。それを学校教育の場で若い世代の子どもに丸暗記させ、苦しめているのである。母国語教育にも外国語教育にも役にたたない、つまり言語活動の実践に役だたないものは、理論に欠陥があることの何よりの証明である。そもそも「単語の文法的なかたち」を研究する分野「形態論」が、国文法には欠落したままである。自分たちも宇宙ロケットやミサイルをつくれると言っていばってみても、ただ主観的な自己満足であって、人類の発展に寄与する国際宇宙ステーションにドッキングさせてもらえないようなものである。「文節」などというかびの生えた用語を若い世代の子どもたちにまことしやかにおしつけているうちは、経験的な訓練のつみかさねで日本語の学習をするためにやってくる外国人がいたとしても、日本に「学問としての言語学」を世界レベルでいっしょに研究発展させようとしてやってくる外国人はうまれにくい。いつまでも学問的な後進国のままである。人類の普遍的な学問発展に寄与できないあわれな大人たちの御用学問である。しかし、若い世代の人々には世界の学問の発展をうけとめ、世界のレベルでともに作りあげる未来も希望も可能性も十分にそなわっている。それを保証していけるのは、民主的な教育現場の実践だけである。

この課の授業はつぎのようなプリントを使っておこなった。

『文節』は単語の認定のし方のあやまりの『てれかくしの概念』！

——「文は単語からできている」というのは言語学の普遍的な原則であり、「文節」こそが無用の概念である——

[確認の作業 ①] 学校文法で暗記させられてきた、「単語」「文節」とはどういうものであったか？

※ つぎの文をいわゆる「文節」で区切るということで、学校文法ではいったいどんなことが暗記させられ、強制させられてきたかという？

(3 文節)

おとうと が かびん を こわ し た。

(名 詞) 助詞 (名 詞) 助詞 (動 詞) 助動詞 (6 単語)

(4 文節)

わたし は いもうと に も おかし を あげ ま し た。

助詞 助詞 助詞 助詞 助動詞 助動詞 (10 単語)

(4 文節)

いもうと は おねえちゃん と は あそん で もら い ま せ ん で し た。

助詞 助詞 助詞 助詞 助動詞 助動詞 助詞 助動詞

(13 単語)

※ 学校文法（国文法）で「助詞」「助動詞」とよんでいるものは、実際に

は、名詞の『格変化』における、名詞の文法的なかたちのしっぽ『接尾辞』 suffix 動詞の変化形における、動詞の『変化語尾』（接尾辞） suffix にすぎない。

単語が文のなかで文法的なかたちをもつのは普遍的な事実！

——名詞は「格変化の体系」のなかで、格助詞をつけて『1単語』
動詞は「変化形の体系」のなかで、さまざまに語尾変化をする、
その変化語尾をつけて『1単語』——

【名詞の文法的なかたち】

【動詞の文法的なかたち】（1単語）

※

本が	駅から	母にも
本を	駅まで	母とも
本に	駅へ	母には
本で	駅で	町でも
本の	駅を	町では
本と	駅に	町へも
本は	駅の	町へは

（1単語）

はしる	はしらない
はしった	はしらなかった
はしれ	はしりなさい
はしろう	はしりましょう
はしるな	はしりません
はしります	はしらせる
はしれる	はしられる
はしれた	はしらせた
はしれました	はしらせません
はしれなかった	はしらせました

※ 日本語の名詞の変化は、『膠着（こうちゃく）的』で、単語のうしろに接辞をくっつけるタイプであり、日本語の動詞の変化は『屈折（くっせつ）的』でもあり、『膠着的』でもあり、単語の語幹のうしろの語尾の母音交替をしたり、語幹に接尾辞をつけたりするタイプである。

※ 単語が文法的なかたちをもって文のなかに存在するという、言語の普遍的な事実を知らずに、『文節』という無用の概念でごまかそうとする、国文法の愚劣さ、学問的なレベルの低さ、遅れがそのまま「学校文法」として子どもたちの使っている今の「国語教科書」のなかに取り残されている。——最新のパソコンという機器のなかに江戸時代のソフトが巣くっている——

日本語の『助動詞』の本当の姿は？

——他の言語にも共通する、普遍的な「助動詞」というものが
日本語にももちろんある——

- ※ 動詞が本来の自分の「語彙的な意味」を失って、もっぱら文法的な役わりをはたすためにつかわれるとき、「文法化する」という。(これが『助動詞』)

「はし <u>っている</u> 」	「つく <u>ってやる</u> 」	「つく <u>ってあげる</u> 」
「こわ <u>してしまう</u> 」	「つく <u>ってもらう</u> 」	「つく <u>ていただく</u> 」
「のぼ <u>ってみる</u> 」	「つく <u>てくれる</u> 」	「つく <u>てくださる</u> 」
「のぼ <u>てみせる</u> 」	「は <u>こんでおく</u> 」	「は <u>し<u>てくる</u></u> 」
	「は <u>こんである</u> 」	「は <u>し<u>ていく</u></u> 」

- ※ この「文法化」が音声的にさらに進行すると、「接尾辞化」していく。

「は <u>し<u>てる</u></u> (hasit <u>teru</u>)」	←	「は <u>し<u>て<u>いる</u></u>」</u>
「つく <u>とく</u> (tuk <u>uttoku</u>)」	←	「つく <u>て<u>おく</u></u> 」
「こわ <u>しちゃった</u> (kowasi <u>tyatta</u>)」	←	「こわ <u>して<u>しまった</u></u> 」
「や <u>った<u>げる</u></u> (yatt <u>ageru</u>)」	←	「や <u>って<u>あげる</u></u> 」
「は <u>し<u>てく</u></u> (hasit <u>teku</u>)」	←	「は <u>し<u>て<u>いく</u></u>」</u>

この課の授業のあとの学生たちのまとめはつぎのようなものである。

- 今日は、「単語」と「文」について学びました。単語は言語の最小単位であり、文は言語活動の最小の構築物であるとわかりました。また、単語は意味を持って、文中で働く「語いと文法の統一物である」と、改めて教わりました。驚いたことは文節などの英訳についてです。中学校でさんざん学んだ文節は、phrase というワードが与えられていましたが、in Japanese という、あくまで日本限定であることが示されていました。一方、村上先生のおっしゃった形態素には、morpheme という正統な訳が存在し、形態素についての学問的な詳しい説明もネットに書かれていました。その情報量の差からも、いかに「文節」が正しい学問からズレているかというのがわかりました。面白いと思った話は、「いる」「あげる」「いく」「しまう」などの動詞が文法化して「助動詞」になり、それが音声的に進化して「接尾辞化」して、今の話し言葉のようになったことです。また、日本語にも韓国語にも後置詞があるという話もなんだか面白かったです。日本語を世界レベルで考えることが外国語を理解するときにも役立つかも!と思いました。感動です。(Yuuko.Y)
- 今回の授業では、言語とその構成単位について学びました。高校までの文法で、単語と文節の違いは、「単語 = 文を区切る最小単位」「文節 = 文を区切る意味をもつ(意味が通じる)最小単位」と習い、文節は「さ」や「ね」をつけて区切るとわかりやすいよ、と言われました。「さ」や「ね」をつけてどこで区切るかには個人差が出て、私はこの指導はどうなのかと感じていました。しかし、この授業を受けたことで、文節という概念の愚かさ、単語と形態素の概念を知りました。更に補助動詞という不思議な定義の存在も思い出し、英語等世界の言語での助動詞の存在との矛盾を感じる事ができました。また、「置いて おいた → 置いといた」というように話すのは、「置いといた」というものが1単語として通じるからであるという解説にとっても納得し、改めて言語の本質が音声

であることを実感しました。今日は終始、先生の「嘘を一度つくと、あとは重ねるしかなくなる」という言葉が見にしみる授業でした。

(Karin.W)

- 言語と言語活動は明確に区別されていて、それぞれの最小単位は単語と文になることが分かった。「言語活動」という考え方をしたことがなかったのも、これまで「ことば」としてあやふやなまま理解していたのだと感じた。一番納得したのは「文節」の必要の無さで、中学校の頃、区切り方が全く理解できなかったのを思い出した。今聞けば本当に感覚だけで捉えようとする教え方で、全然学問的じゃなかったと感じた。これまで習っていた助詞や助動詞は、世界的にみれば形態素になり、補助動詞と呼んでいた部分が本当の助動詞だと知ることができて、すっきりした。
(Ayaka.U)

- 「言語」と「言語活動」の最小単位が、それぞれ断片（材料）と構築物であり、特に「言語活動」に関しては、聞き手と話すという本質があるため陳述性が重要であることを学びました。この陳述性には、①モダリティ（話す目的）②テンポラリティ（時間）③パーソナリティ（人称性）の要素が含まれており「言語活動」には、「言語」には存在しない空間的な複数の情報が詰め込まれているなど感じました。また、両者を明確に区別することの重要性を感じました。さらに、当たり前の概念であると思っていた「文節」「補助動詞」という言葉が実はそうではなく、日本人が“単語”そのものの本質や意味をちゃんと理解していないがために作られた悲しい言葉（word）であることを知って驚きました。“単語”というものは意味をもち、文のなかで働く、語彙と文法の統一物であるから、単語は変化し、また単語の内部にあって suffix の全体である形態素という全世界の言語で共通する概念をしっかりと理解することが、日本語を客観的に捉えるようにするには必須であると思いました。

(Ayaka.T)

- 今日の授業で「形態素」という言葉を初めて知りました。形態素があるのだと意識すれば、今まで習ってきた文節という区切りは意味が無いのだと分かりました。そして、日本語の助動詞はちゃんと存在していて、“動詞として意味を持たないもの”と捉えることで、これまでよりも理解しやすくなりました。「～して しまう」を「has gone」と対応させて考えると、とても分かりやすかったです。後置詞は、今まであまり意識してきませんでしたが、日本語の中で発達していったものだと分かった、これからもっと意識して学んでいきたいです。 (Moeka.K)

- 今回の授業では、単語で区切る時、「お兄ちゃんが 犬と 遊ぶ」だと、3単語だけど、日本の国文法では5単語になるのはおかしいという理由について詳しく学びました。上の文を3つにわけける方法として、文節で区切るとき、今まで「ね」をつけて違和感のない区切り方とかやっていたのですが、そもそも文節という概念があるのは日本だけで、ほかの言語に訳せないということを初めて知りました。そのうえ、文は単語でできているので、その文節という概念も意味がないということもわかりました。また、新しく知った言葉の「形態素」は単語の文法的なかたちのなかにあるもので、世界中で知られているのに、日本では文節というごまかしを使っているのがちょっとなあと思いました。 (Chika.H)

- 今日は、改めて単語と文の違いや定義について学んでみて、やはり日本語の学校文法の考え方は、主観的だと感じました。単語は、①意味をもつもの、②文の中ではたらくものですが、学校文法でいう“単語”には助動詞や接続助詞や助詞の「は」「が」など、そもそも意味をもたないものが含まれていて、本末転倒だなと思いました。また実際に“文節”の意味を調べてみると、直訳できる英単語がなかったことから、いかに日本語の国文法が主観主義であるかが分かりました。日本語には形態素というものがきちんとあり、補助動詞は存在せず、それこそが助動詞であるということが分かって、自分の考えが世界レベルになったように感

じました。今まで私が習ってきた文節での分け方は、あくまで suffix であって、形態素と結びつくことで1つの単語として意味を持つことが分かりました。動詞が語彙的な意味を失って文法化したもの（いわゆる助動詞）が、さらに音声的に進行し、接尾辞化した日本語（例えば「作っとく」など）と英語の「do not」が「don't」になることを比較したときに、2つの言語が類似しているなと思い、少し嬉しかったです（笑）。

(Minami.N)

- 今日の講義もありがとうございました。毎度おつかれさまです。もう6月も終わりにさしかかり、先生の授業を受けるのも残りわずかだと思うと、すこしさみしい感じがして、授業に集中できました。前回で動詞の変化形が終了しており、一段落という感じがして、今日の授業はより発展した内容の授業がきけると思うと、とても楽しみでした。今まで、文の単位について習ったときに、文節って何だろう？と思ったことがなかったのですが、辞書でしらべて、今回はじめて文節が普遍的なものではないことに気づかされました。今日、先生がおっしゃっていた言葉で、「私はテストのためにみんなに教えているのではない」という言葉が心に残りました。のびのび学習できる大学はとても楽しいものだなと思いました。

(Hiroko.T)

- 今日の授業では、言語と言語活動のちがいや、単語とは何か、文とは何かといことを改めて学ぶことができました。また、学校文法における「単語」の誤った認定、「文節」という無用の概念についても改めて考えることができました。教育実習に行った際にも、文法の授業では「私はネ / ごはんをネ / 食べましたヨ」のように文節に区切る練習をしたり、「わたし」「は」「ごはん」「を」……のように単語に分ける練習を作業をさせていて、これでは子どもたちがとてもかわいそうだなと感じていたので、やはり学校文法はとても愚かなものだなと思いました。

(Rino.A)

● 「おじいちゃんが まごに ほんを あげました。」という文を、4単語ではなく、9単語として捉えることは、水を飲むことを水素と酸素を飲むと言っていることと同じであるという例え方がとても分かりやすく、面白いなと思いました。また、世界中にはたくさんの言語があって、人間が口で出せる音のバリエーションには限界があるにも関わらず、それぞれの言語が特徴を持てることがとても不思議でした。しかし、言語の最小単位である単語が、音の連続が何かと結びついたものである、というこれ以上ないくらい分かりやすい説明を受けて、出せる音の種類には限りがあるけれど、音の組み合わせ方は数え切れないほどたくさんある為、多様な言語が存在できているのかなと思いました。(Mikana.I)

● 日本語を客観的に見つめ、言語の単位について熟考した。言語の最小単位は単語、言語活動の最小単位は文である。後者は陳述性をもちあわせている。モダリティとテンポラリティとの関連性をもち、センテンスタイプから、話す目的は、時間と人称性に関係してくる。村上先生から「単語」として習ったものが、学校文法では「文節」として習うが、これは世界に通用せず、授業中に紹介された英訳がこれを裏づけることで、これを自覚できた。単語とは、グラマチカルフォームからなる、1. 意味をもった、2. 文のなかではたらくものであるが、これは、文法に従い、語いと文法との統一物であるということに初めて気づかされた。単語の内部の形の変化の要素である「形態素」というものを初めて知ったが、これに留意することで、視野が広がっていくのではないかと思った。3つの重要なミーニング (lexical・categorical・grammatical) なども再度復習して、ほんとうの日本語の学びを深めていきたい。

(Natsuki.S)

● 今日は、単語が文のなかでどういう形をとっているのか、について深く学習しました。まず、小学校で暗記させられた「文節」という概念が間違いだったと知ることができました。和英辞典で「文節」を引いた

時、「in Japanese」とつくのは確におかしいと思います。今回、この授業で「形態素」という言葉を知れてよかったです。また、「助動詞」についても、「ます」「さす」などを指すと思っていましたが、今日、そのことが間違いだとも知れてよかったです。「はしって いる」の「いる」は意味のない動詞ではなく、本来の語彙的な意味を失って、文法的な役わりをはたすためにつかわれるときに、「助動詞」という話も含め、改めて言語は普遍的だと実感しました。日本語にしか存在しないと言って、間違っただけを教える学校概念はおかしいと思います。

(Nanako.T)

- 今日の講義では、「文節」の英語訳が「in Japanese」であることに衝撃を受けました。やはり日本（の国文法）は、想像以上に孤立しているのです。また、文節の句切りも、「ね」が入って違和感がない所としか、確かに習っておらず、そのような定義が不明瞭なものを何の疑問も持たず試験で点数を取るために覚えてきたことに対し、愚かだなと感じました。「一度嘘をつくと何度も重ねてしまう」というのは、今の現状を言い当てていると思います。世界に通用するちゃんとした「助動詞」というものがあるというのは、今日初めて学びました。授業の話やプリントを読むことで、動詞が文法化されたものであるということを理解することができましたが、まだ、自分できちんと説明できるほど理解をしていないように感じるのです。しっかり復習したいと思います。

(Mika.O)

- 今日は、以前から気になっていたことが、またひとつ解決しました。それは「文節」についてです。中学校で習った「文節」の部分で、村上先生は単語の区切りとなることをこれまでに教えてくださいました。それでは「文節」とは何なのかと思っていたのですが、そもそも「文節」という概念が世界的にはありえないということで、やっと自分の中で処理しきれました。また、いわゆる助動詞は形態素であるというお話し

の中で、“make him go”の、“make”は、ある意味「助動詞」であるという話に納得することができたので、「はしって いる」の「いる」が助動詞であることが理解できました。(Asami.H)

- 今日も、刺激的な講義をありがとうございました。沖縄も梅雨が明けましたね。この間、私用で仙台へ行きましたが、さすが東北、カラッと涼しくて驚きました。先生の故郷もきっと今過ごしやすい頃なのでしょうね。さて、今日の講義で印象に残ったことですが、初めの方から先生が強調なさっていることが再び話題にのぼっていて、再認識されることとなりました。それは、助詞や助動詞ではなく、名詞が活用しているということです。「動詞の suffix」という言葉が、他の研究者らと考えることが違って、村上先生の個性的な考え方が出ていて面白いと思います。今一度、日本語の文、文節、そして単語の在り方を考え直すことができる良い機会でした。(Hikari.C)

- 今回は改めて、文、単語について学びました。今までの授業によって、日本の単語の規定はおかしいとは思っていましたが、たくさんの助詞や助動詞があり、名詞や動詞の後ろにつくものは1種類だけではなく様々であるために、名詞と助詞などを1つの単語としてそれぞれ分ける、と始めに規定した人の気持ちも分かると思っていました。しかし、今日の授業で、これがどれだけおかしなことか痛感しました。まず、文節という言葉は日本にしかないということ、そして、世界ではそれを「単語」というのです。また、世界的に助詞などは「形態素」と規定されているのです。さらに、日本では補助動詞となっているものも、世界では「助動詞」となっているのです。このことを知っても、世界標準に合わせないのはおかしいと思いました。(Yurika.Y)

- 今日は「単語の本質」を学びました。単語は「語いと文法の統一物」で、だから名詞などが活用しないなんてありえない!と改めて知りました。

小中高の教育での、動詞の変化形における語幹と語尾の区切り方の浅さが単語の認定のまちがいにみちびくということも心に刺さりました。私がこれまで完全に「正しい」と思っていた単語の認定法は、本質を知るといろいろとズレがあったのだなと悲しくもあり、気づけたことに対する嬉しさもありました。また、話を聞いていくなかで、本当の『助動詞』はどこにあるのか？もしかしたら存在しないのか？という疑問もありましたが、解決されました。動詞が「語的な意味」を失って、文法的な役割を果たすために使われる時、助動詞がそこに存在していました。日本語も、他国の言語と同様に規則的な形態をもっていて、決して劣っているわけではないと感じ、嬉しく思いました。(Jou.Y)

- 文を「文節」で分ける時に、「ね」で分ける方法は便利な感じがして高校までよく使っていましたが、改めて考えてみると、とてもあやふやで信頼性の低い方法だと思いました。「文は単語からできており、“文節”は無用の概念だ」というフレーズがしっくりきました。名詞が文法的なかたちをもつと考える点や、何を助動詞と捉えるかという点で、日本の国文法は他の国と異なる考え方を持っていることに気づかされました。文節で「こわされました」を区切る時に、5つの単語に分けられてしまうのが、非常にあほらしく面白かったです。この「こわされました」が「1つの単語の文法的なかたち」として捉えられる方が自然で、このように考えられるようになってほしいと感じました。(Rina.K)

(以上、第12課まで) (第13課以降は次回に)

